

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向

末 永 國 紀

目 次

- 一 府県別企業勃興と商人資本
 - 二 東京府下の動向
 - 三 京都府下の動向
 - 四 大阪府下の動向
 - 五 兵庫県下の動向
 - 六 新潟県下の動向
 - 七 群馬県下の動向
 - 八 愛知県下の動向
 - 九 静岡県下の動向
 - 十 岡山県下の動向
 - 十一 愛媛県下の動向
 - 十二 福岡県下の動向
 - 十三 北海道の動向
- 小 括

一 府県別企業勃興と商人資本

松方大蔵卿のいわゆる松方財政政策の実施による財政金融制度の確立は、明治二〇年前後から企業勃興をもたらした。この時期の企業を『帝國統計年鑑』によつて、銀行を除く、農業・工業・商業・水陸運輸の四業種に分けて業種別企業数の推移をみると、一表のように明治一九年から二二年の四年間にかけて最大の増加を示している。松方デフレ政策の影響の最も厳しかった一八年の一二七九社から飛躍的に増加して二二年には四〇六七社となった企業総数のなかでも占立つのは、四九六社から二二五九社へと著増した工業部門であり、ついで商業部門の六二五社から一〇七九社への増加である。農業部門と水陸運輸部門の企業は増加後の企業数の一八%を占めるに過ぎない。またこの間の銀行数（銀行類似会社を含む）は一〇三行から一〇四九行へと横ばい、ないし微減状態にある。

明治一九年から二二年にわたる四年間の企業勃興に商人、なかでも老舗の商人達ほどの様に関わつたのであろうか。この時期の商人資本の全国的動向の解明に資するまつたく同一時期の資料は得られない。そこで明治二五年の『日本全国商工人名録』、二八年・二九年の『日本全国諸会社役員録』を中心の資料とし、府県史・郡誌・市町村史等の地方史や社史を補充的に利用しながらこの問題に接近することにしよう。まず中心となる資料の概要を述べておこう。

正確には明治二五年四月に東京において出版された『日本全国商工人名録』は、全国規模の商工人名録の第一版であり、山形県酒田町で茶陶器商を営む白崎五郎七等によつて編纂されたものである。編纂者によれば同書の調査方法は「委員十余名ヲ全国各地二分遣シ府県庁、郡区市役所或ハ其他ノ公役場ニ就キ所得税營業税、又ハ物品製造高売上高等ヲ明細ニ記入セシ原簿ノ類ヲ借覽シ其内重要確實ト認メタル商工家、銀行、会社、商會、工場等ヲ撰ビ而シテ業務、商標、屋号ノ如キ細目ハ親ク當業者ニ問合セ又ハ證印アル筆記ヲ取メ其ノ誤謬之レナシト憑信シタルモノ、ミラ

1表 産業別会社数・資本金の推移

年度	農業会社		工業会社		商業会社		水陸運会社		合計	
	社数	資本金	社数	資本金	社数	資本金	社数	資本金	社数	資本金
明治 17年 (1884)	61	123	379	504	654	898	204	689	1298	2216
18	78	145	496	777	625	1585	80	2558	1279	5065
19	85	105	1097	1472	315	993	158	2477	1655	5048
20	144	292	1361	2001	374	1923	159	2568	2038	6785
21	204	596	1694	3903	545	2140	150	5126	2593	11766
22	430	811	2259	7019	1079	3543	299	6985	4067	18361
23	465	822	2284	7752	1201	3608	346	10363	4296	22547
24	399	631	2480	7029	1095	2811	332	9486	4306	19958
25	361	443	2746	6901	1081	3051	319	9474	4507	19874

註. 出典：『帝國統計年鑑』。資本金は万円未満切捨て。

採リテ掲出シタルモノナリ、最モ其間巡回ノ都合ニ依リ公役場等ニ照会シ其手ヲ終テ蒐集セシモノ三四箇所アリ」というものであり、調査員を直接派遣する方法と調査項目の照会という間接的方法を併用している。調査期間については「本書ハ稿ヲ明治二十二年五月ニ起シ同二十五年三月ニ畢リ其間殆ンド三閱年、是ヲ以テ各地ノ調査一々其ノ年月ヲ相等シクセズ」というものであり、後述するように各地の調査年月が同一ではないことを断わっている。全編一六〇頁を越える内容は、一四〇頁からなる「日本商業地理之部」が前編をなし、大部分を後編の「商工人名之部」が占めている。「商工人名之部」には、各府県の全体の地誌が記され、府県内の主要市町村の商工人名が営業種目ごとに分類して記載されている。しかも住所・氏名のみならず営業種の細目・屋号・商標も併記されている。また各市町村の人名の後は、その他の銀行・会社・新聞・出版社の住所・社名・代表者の名簿が続き、商業会議所のあるところではその会員名も載せられている。調査時点は市町村によって異なり、明治二十二年一〇月から二十四年一月にわたっている。したがって同書——以後、「人名録」と略称——は我々の問題設定時期にもっとも近接した商工人名録といえる。「人名録」を補正するために三十一年の第一版を援用し、時により四四年の第四版も活用した。

次に、全国各企業の役員録の嚆矢は、土佐出身の大高阪秀之が編纂・発行者となつて明治二六年に大阪において刊行された『日本全国諸会社役員録』である。同書の調査方法は、「第一着ニ全国三府一庁四十三県下ニ設立スル諸会社ノ役員及營業種類等ヲ取調べ、第二着ニ以上会社ハ数回信書ヲ發送シ掲載ノ事項ヲ再調シ」というように、各企業からの郵送による情報提供によつて編纂されたものである。以後同書は、二八年の第三回からは、最初の信用調査機関として二五年四月大阪において戸山脩三を所長に設立された商業興信所の年次刊行物となつて昭和一九年まで継続刊行されている。同書の二六年の第一回本は同年四月現在の記録であるが、社名・所在地・氏名・職位を中心とするものである。合名図書館版となつた二七年の第二回本には前年の項目に加えて設立年月・事業目的・株数・株式額面・資本金等が載せられている。商業興信所版となつた二八年の第三回本は同年五月現在の調査であり、第二回本の項目に加えてさらに、資本金払込高・積立金額と記載人名の住所が明記されるようになる。したがつて、明治一九年から二二年という我々の設定期間に設立された企業名と役員名とその住所を同時に知ることが出来る最初のもは、二八年の第三回本——以後、『役員録』と略称——ということになる。しかし、この二八年版は当該期間に設立された企業の脱漏や設立年月の誤記多く、二九年版によつて補正しなければならなかつた。

また明治二〇年七月に、東京の博文館から発売された「日本三府五港豪商資産家一覽」があり、この一覽表には調査の方法は記されていないが、当時日本の貿易の中心となるべきであると考えられた東京・京都・大阪・横浜・神戸・長崎・新潟・函館という八大都市の、資産三万円以上と日される資産家の氏名・營業種が揭示されている。さらに明治三一年の『日本全国商人人名録』によつて、東京や北海道・沖縄を除く地価額一万円以上(二〇〇〇五〇町歩)の大地主名簿を居住地とともに知ることが出来る。すなわち、商人の營業種は「人名録」と「日本三府五港豪商資産家一覽」によつて、地主名はこの大地主名簿によつて全国的規模で知ることが可能である。

2表 府県別設立企業数 (明治19~22年)

東京	49	茨	5	宮	3	島	6	大	分	6
都	16	橋	7	福	2	岡	11	佐	賀	4
阪	67	奈	1	岩	0	山	7	熊	本	5
神	3	三	6	背	2	口	6	宮	崎	1
奈	51	愛	16	山	1	山	3	鹿	島	1
兵	6	静	20	秋	1	和	1	宮	島	1
長	9	山	3	福	3	徳	4	鹿	島	1
新	1	滋	8	石	5	尊	12	沖	道	15
埼	10	岐	2	富	3	愛	5	北		
群	5	長	9	宮	2	高	17			
千				島		福		計	421社	

註. 出典：『日本全国諸会社役員録』(明治二八年・二九年版)

二八年までに倒産や吸収合併された企業は除かれるにしても、『人名録』と『役員録』を組み合わせたの主軸とし、二〇年の豪商資産家一覽——以後、『三府五港』と略称——や二二年の大地主名簿——以後、「大地主表」と略称——を参照することによって、当該設定期間の四年間に設立された企業には、二二年から二三年にかけての最初の経済恐慌に耐えて、二八年当時どのような商営業者や地主が役員となっていたのかが判明する。そのことから当該設定期間に設立された企業の発起時の出資者の傾向を推定し、商人資本の動向を探ろうとすることが本稿の目的である。

二八年版『役員録』に収録された企業数は株式会社、合資・合名会社、個人企業、共同事業は合わせて二五七八社であり、このうち当該期間に設立された企業は一六・三%にあたる四二二社である。府県別では、2表のように大阪がもつとも多く六七社、兵庫五一社がこれにつき、東京は四九社、京都は一六社である。以下、『役員録』の記載順に一〇社以上の県を拾うと、群馬一〇、愛知一六、静岡二〇、岡山一、愛媛二二、福岡一七、北海道一五の一一道府県である。これらに次ぐ設立九社の県は新潟と長野である。大阪・兵庫の企業数が多く、東京の数字が四九社と比較的少なく、神奈川が三社にとどまっているのは、発行元が大阪に所在し、郵便による調査方法を採用していることもいくらか反映しているかもしれない。

以下においては、当該期間の設立企業一〇社以上の府県を検討の対象とするが、日本海側の県は含まれないので同地方では最大の九社が設立された新潟を加え、一二道府県について『役員録』の掲載順に検討をすすめることにしよう。役員 の 範囲は、株式会社、合資・合名会社の場合は社長以下取締役、監査役（検査役）までとし、個人会社は業務担当者、共同事業の場合に理事を加えた。なお、以下に述べる府県に設立された企業の商人役員数には、他府県居住者を含むが、考察対象は地元居住者かあるいは出店を設置している商人に限った。

二 東京府下の動向

東京府下において、二八年五月の調査時点まで存続している一九年から二二年の四年間に設立された企業数は3表のように四九社である。役員延数は二六九人、重複を除いた役員純数は二三七人である。このうち、4表に表示のように『人名録』等によって商営業者であることが判明するのは一〇二人であり、四三・〇%を占めている。役員の中に商営業者の名前を見いだせないものは株式会社である東華銀行・株式質・村田銀行・東京湾汽船・東京倉庫・東京火災保険・下野製麻・日本麦酒・王子共潤―不動産―と合資会社の市中音楽会・スレート商会、北海道田中―海産物―合名会社それに東京急報社の計一三社である。残りの三六社はなんらかの商営業を営んでいる者が役員 の 構成員に入っている。

商営業者が役員の中に多く名を連ねている企業を業種の面からみると、繊維、金融、運輸、食品がとくに多く、ついで金属、建築資材、製紙、砂糖、ガス・電燈等であり、在来産業関連業種とともに外来移植の新業種にもわたっている。

つぎに役員の人的側面をみるために複数の企業の役員となっている一四名の商人を拾い出してみよう。東京割引銀

3表 東京府下設立企業 49社

(掲載順は「商工人名録」による)

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株)東海銀行	日本橋区	22. ^年 8	50.0 ^{万円}	8 ^人
(株)東京割引銀行	日本橋区	21.6	12.5	7
(株)東華銀行	京橋区	22.11	10.0	5
(株)麴町銀行	麴町区	22.—	10.0	6
(株)村田銀行	芝区	22.—	5.0	4
(株)株式質	西多摩郡	22.9	5.0	6
(株)両毛鉄道	下谷区	20.5	150.0	9
(株)甲武鉄道	麴町区	21.3	135.0	7
(株)総武鉄道	本所区	22.3	120.0	9
(株)東京湾汽船	京橋区	22.11	25.0	5
(株)東京石川島造船所	京橋区	22.1	25.0	6
(株)日本運輸	日本橋区	20.3	25.0	5
(株)品川馬車	荏原郡	22.11	10.0	5
(株)東京火災保険	京橋区	21.10	100.0	7
(株)帝国生命保険	日本橋区	21.3	30.0	7
(株)鐘淵紡績	南葛飾郡	20.5	250.0	7
(株)東京紡績	深川区	20.4	75.0	5
(株)日本織物	日本橋区	20.11	50.0	6
(株)小名木川綿布	南葛飾郡	20.8	35.0	7
(株)東京製絨	北豊島郡	20.8	35.0	6
(株)製紐	北豊島郡	22.6	2.0	5
(株)下野製麻	日本橋区	20.11	30.0	5
(株)品川電燈	芝区	22.6	20.0	7
(株)富士製紙	京橋区	20.11	100.0	9
(株)東京板紙	北豊島郡	22.6	18.0	7
(株)東京銅鉄	日本橋区	22.12	10.0	8
(株)東京製綱	麻生区	20.4	20.0	5
(株)深川製綱	深川区	20.6	3.0	3
(株)東京倉庫	深川区	20.4	50.0	8
(株)米倉庫	深川区	22.2	25.0	5
(株)日本セメント	京橋区	21.1	22.5	7
(株)金町製瓦	京橋区	21.5	10.0	5
(株)常陸石材	日本橋区	22.9	20.0	5
(株)東京石材	京橋区	22.7	4.0	6
(株)江東濾水	深川区	22.10	2.5	6
(株)口本麦酒	荏原郡	20.9	30.0	5

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向(永水國紀)

(株) 日本家畜市場	芝 区	19. 7	35.0	6
(株) 東京人造肥料	南葛飾区	20. 4	12.5	5
(株) 東京砂糖	日本橋区	21. 6	5.0	5
(株) 東京機械製造	日本橋区	21. 8	12.0	5
(株) 日本製蠟	荏原区	22. 7	10.0	6
(株) 八王子米穀	南多摩郡	22.11	2.0	6
(株) 王子共潤一不動産一	北豊島郡	21. 3	0.5	6
(資) 市中音楽会	芝 区	22. 9	1.0	2
(資) スレート商会	京 橋 区	22.12	0.335	1
(名) 塚本一呉服木綿一	日本橋区	22. 2	30.0	1
(名) 共同牛馬一運送一	下 谷 区	19. 8	—	1
(名) 北海道田中	日本橋区	22. 9	—	1
(個) 東京急報社	日本橋区	19. 2	—	1

行、富士製紙、東京機械製造、両毛鉄道の四社の役員となっている小野金六は、嘉永五年山梨県北巨摩郡韮崎の酒造商兼呉服商の家に出生した。明治六年東京に出て、曲折を経て米商として活躍し、第十国立銀行の支配人となつて銀行界に入り、原亮三郎等と東京割引銀行を創立し、安田善次郎・山本達雄、森村市左衛門等を説いて富士製紙を設立するなど、若尾逸平・兩信敬次郎と並ぶ甲州系を代表する事業家である。

東京割引銀行、富士製紙、東京機械製造の役員である原亮三郎は、嘉永元年美濃の大庄屋の家に出生し、一六歳で大庄屋を世襲した。明治五年東京に出て前島密の知遇を得て、六年神奈川県史生となつた。県知事・中島信行の教示により明治八年官を辞し、横浜、次いで翌九年東京において文部省編纂の小学教科書を翻刻販売した。同時に諸種の書籍を出版する金港堂という書籍店を興し、教科書書籍店として全国に代理店を組織した。一七年、森有礼の勸奨により店内に編集所と書籍販売店を並存させ、出版業と書籍販売業に務めた。二一年日銀總裁・富田鉄之助等の勧めにより小野金六・川崎東作等と手形割引のための東京割引銀行を創設した。⁽¹⁾二五年には岐阜県選出の衆議院議員となり、二六年資本金五〇万円の金港堂書籍株式会社を組織し、みずから社長に就いた。⁽²⁾二四年当時は出身地に関係深い第十五国立銀行頭取である。

4表 東京府商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
小野金六	米穀商	(株)東京割引銀行・(株)富士製紙・ (株)東京機械製造・両毛鉄道
原亮三郎	書籍商	(株)東京割引銀行・(株)富士製紙 (株)東京機械製造
白井練一	書籍楽器洋紙商	(株)東京割引銀行
黒部利兵衛	旅人宿	(株)東京割引銀行
雨宮敬次郎	貿易商	(株)甲州鉄道
岩田作兵衛	雑商	(株)甲州鉄道
安田善次郎	両替商	(株)甲州鉄道
森村市左衛門	貿易商	(株)甲武鉄道
中沢彦吉	酒類問屋	(株)総武鉄道
松田源五郎	貿易商	(株)東京石川島造船所
松下覚之丞	茶商	(株)日本運輸
神谷伝兵衛	酒商	(株)日本運輸
浜口吉右衛門	醬油食塩問屋	(株)鐘淵紡績
佐羽吉右衛門	呉服太物問屋	(株)鐘淵紡績・(株)日本織物
鶴岡助次郎	糸類商	(株)鐘淵紡績・(株)麹町銀行
稲延利兵衛	下駄傘類問屋	(株)鐘淵紡績
上屋彦平	木綿問屋	(株)鐘淵紡績
鹿島万兵衛	紡績綿糸商	(株)東京紡績
佐羽喜六	織物買次商	(株)日本織物
阿部孝助	呉服木綿商	(株)日本織物・(株)東京製絨
丹羽長平	織物買次商	(株)日本織物・(株)両毛鉄道
菊池長四郎	呉服太物問屋	(株)日本織物・(株)富士製紙・(株)日本セメント・(株)東海銀行・(株)両毛鉄道
小林吟治郎	呉服太物問屋	(株)小名木川綿布
山岡正治	三越呉服店	(株)小名木川綿布
村田一郎	商業(業種不明)	(株)小名木川綿布・(株)富士製紙
山下吉三郎	筆墨硯問屋	(株)小名木川綿布
柿沼谷蔵	和洋綿糸商	(株)東京製絨・(株)金町製瓦
町田徳之助	生糸類毛糸商	(株)東京製絨
若林七五郎	材木商	(株)東京製絨
平田万次郎	糸組物問屋	(株)製紐
内藤国藏	糸商	(株)製紐
杉浦作次郎	呉服太物商	(株)品川電燈
相川小兵衛	材木商	(株)品川電燈

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向(末永國紀)

浅野 総一郎	石 炭 商	(株)東京製紙・(株)東京板紙 (株)東京人造肥料
喜谷市郎右衛門	壳 薬 商	(株)富士製紙
今村 清之助	両 替 商	(株)富士製紙
山中 隆之助	貿 易 商	(株)東京板紙・(株)両毛鉄道
鳥山 梯次郎	質 商	(株)東京板紙
森岡平右衛門	和洋鉄銅物類問屋	(株)東京銅鉄
竹内 喜三郎	錫鉛地金問屋	(株)東京銅鉄
衫村平兵衛	鉄鋳物類問屋	(株)東京銅鉄
中村重兵衛	洋釘捻紙問屋	(株)東京銅鉄
森 友 蔵	銅和洋鉄銅問屋	(株)東京銅鉄
加藤安五郎	洋釘亜鉛板問屋	(株)東京銅鉄
斎藤六兵衛	銅和洋鉄物問屋	(株)東京銅鉄
深山小兵衛	和洋紙茶問屋	(株)東京銅鉄
石崎 政 蔵	米 穀 商	(株)米倉庫
別所五兵衛	米商会所仲買	(株)米倉庫
磯 貝 和 助	廻 米 問 屋	(株)米倉庫
永山 正 平	米商会所仲買	(株)米倉庫
菊池治郎兵衛	セメント商	(株)日本セメント
向山小平次	呉服太物問屋	(株)日本セメント
堀江半兵衛	質 商	(株)日本セメント・(株)東海銀行
吉田 幸 作	質 商	(株)日本セメント・(株)東海銀行
中 嶋 行 孝	株式取引所肝煎	(株)東京石材
桑原 諱 三	銃 砲 火 薬 商	(株)東京石材
名子 新 七	印紙類壳捌	(株)江東濾水
小林長右衛門	飲 用 水 商	(株)江東濾水
山浦 俊 武	飲 料 水 商	(株)江東濾水
岩谷 松 平	木 綿 太 物 商	(株)日本家畜市場
細川芳之助	洋 紙 問 屋	(株)日本家畜市場
熊谷 平 三	薰香筆墨硯商	(株)日本家畜市場・(株)日本製蠟
黄川 田 与 七	牛 肉 店	(株)日本家畜市場
大内 重兵衛	旅 人 宿	(株)日本家畜市場
洪 沢 喜 作	米 商	(株)東京人造肥料
鳥海清左衛門	砂 糖 問 屋	(株)東京砂糖
高 嶋 勘 六	砂 糖 問 屋	(株)東京砂糖
殿木 善兵衛	砂 糖 問 屋	(株)東京砂糖
中川 民 七	砂 糖 問 屋	(株)東京砂糖
田村 金 祐	砂 糖 問 屋	(株)東京砂糖

塚本定右衛門	呉服太物問屋	(名)塚本—呉服木綿究買—(近江国神崎郡川並村)
中沢与左衛門	旅人宿	(名)共同中牛馬—陸運業—(信濃国上水内村)
菊池晋二	質商	(株)東海銀行
早川松之助	漬物味噌商	(株)東海銀行
茵村又右衛門	刀劍商	(株)東海銀行
吉田丹治郎	太物問屋	(株)東海銀行
田中武兵衛	肥料問屋	(株)麴町銀行
矢沢小兵衛	質商	(株)麴町銀行
垣見八郎右衛門	酒類醬油商・両替商	(株)麴町銀行
河合徳兵衛	質商	(株)麴町銀行
森田又兵衛	洋小問物商	(株)品川馬車
烏山藤四郎	酒類醬油商	(株)品川馬車
福原有信	薬種商	(株)帝國生命保険
松本伊兵衛	薬種問屋	(株)帝國生命保険
小西安兵衛	絵具染料・薬種線香	(株)帝國生命保険
吉村甚兵衛	通運業	(株)帝國生命保険
尾嶋喜三郎	船具商	(株)深川製鋸
大村五左衛門	麻苧糠問屋	(株)深川製鋸
渡辺真次郎	銅鉄機械貿易商	(株)深川製鋸
森宗五郎	洋糸商	(株)金町製瓦
高嶋嘉右衛門	材木商	(株)常陸石材
岩下善七郎	織物買次商	(株)両毛鉄道
木村半兵衛	織物買次商	(株)両毛鉄道
根岸太助	呉服太物商	(株)株式質
市川正平	質屋	(株)株式質
野村五兵衛	質屋・材木商	(株)株式質
脇坂助右衛門	生晒蠟問屋	(株)日本製蠟
山崎又兵衛	鼈甲小問物問屋	(株)日本製蠟
関屋直右衛門	米穀肥料商	(株)八王子米穀
豊泉古兵衛	生糸商	(株)八王子米穀
川嶋新三郎	米穀肥料商	(株)八王子米穀
斎藤栄八	米穀肥料商	(株)八王子米穀

註、営業種の出典：『日本三府五港豪商資産家一覽』・『商工人名録』・『日本紳士録』・『人事興信録』・『明治人名辞典Ⅱ』・『足利織物史』・『本邦綿絲紡績史』・『帝國実業家立志編』・『実業家百傑伝』・『商界英傑伝』・『実業人傑伝』・『財界物故傑物伝』等。

()は府外居住所。

鏡淵紡績と日本織物の役員を兼務する佐羽古右衛門は、慶応三年一〇月九日江戸中期から続く桐生の織物買次商の家に生まれている。⁽⁵⁾ 回家は江戸日本橋本石町に支店を置き幕末から明治初期にかけては桐生産織物の過半を取り扱うまでに成長している。⁽⁷⁾ 古右衛門は明治一四年桐生物産会社の社長に推されて輸出羽二重の製出を手がけ、日本織物会社を起し、⁽⁸⁾ 二四年当時は、同社社長であり、東京日本橋区本石町の出店は呉服木綿問屋となっている。鶴岡助次郎は伊勢屋と称し、麴町のほかに横山町にも出店している糸類卸商であり、鏡淵紡績と麴町銀行の役員である。⁽⁹⁾

日本織物と東京製絨の役員を兼ねる阿部孝助の経歴はとくに我々の関心を引くものがある。阿部は嘉永元年江戸の呉服商に生まれ、安政六年江戸の呉服店に丁稚奉公に入り、後にその家の養嗣子となり、下谷区に呉服木綿商を営む。明治一八年製絨工場を向島に興し、その規模拡張のため二〇年川崎八右衛門、宮部久、柿沼谷蔵等と資本金三五万円の東京毛糸紡織会社(東京製絨の前身)を北豊島郡王子に設立し、翌年製絨機械購入のため白ら渡欧し、英国の製絨機械を輸入して製出に努力し、軍・警察に納入するにいたった。日本織物の創設にも参加して取締役となり、また帰国後は田村喜三郎、天野仙輔と図って日本メリヤス会社を興し(日本メリヤス製造株式会社の前身)、阿部の呉服木綿店はその特約販売店となっている。⁽¹⁰⁾ この様に、阿部は役員を勤める日本織物(株)と東京製絨(株)の発起人でもあったのである。

日本織物、富士製紙、日本セメント、東海銀行、両毛鉄道の五社の役員を兼務する菊池長四郎は、嘉永五年、文化年間から日本橋区元浜町に佐野屋の屋号で呉服太物業を営む問屋商人の家に出生した。明治三〇年貴族院議員に当選し、⁽¹¹⁾ 三一年の所得額は三万九五七円で東京の織物問屋の首位である。⁽¹²⁾ 東海銀行には創立以来関与している。⁽¹³⁾

東京板紙と両毛鉄道の山中隣之助は、天保一一年武蔵国秩父郡小鹿谷に生まれ、若年時から江戸で商業に従事し、やがて外国貿易により財を築き、第三十二国立銀行取締役をはじめ鉄道会社の役員に推され、一三三年には埼玉第五区

から衆議院議員に当選した。⁽¹⁴⁾

東京製絨と金町製瓦の柿沼谷蔵は上州館林の出身で、明治一二年東京に出て綿糸商柿沼家の養嗣子となった和洋綿糸商であり、前記の通り東京製絨の創立者の一人である。⁽¹⁵⁾後に浅野財閥を築く石炭商の浅野総一郎が東京板紙、東京製綱、東京人造肥料の役員に名を連ねているのは異とするにあたらないであろう。嘉永元年江戸生まれで方屋という質屋を営業し、府會議員・本郷区會議員となる堀江平兵衛と、佐野屋なる質屋を営む吉田幸作の二人は、東海銀行・日本セメントの役員である。両人は東海銀行の創立に参加し、⁽¹⁶⁾吉田は二四年当時同行頭取である。

日本家畜市場・日本製蠟の熊谷平三は蕙香線香筆墨硯類を扱う京都屈指の老舗、鳩居堂の東京支店主である。嘉永五年に同店熊谷家の一門に出生し、戊辰戦争には薩摩軍に属して従軍し、明治三年欧米に渡航して法学を修め、帰国後は法曹界や自由民権運動において活躍する一方、大日本火災保険、中央生命保険、大阪火災保険会社等、保険会社の設立振興に力を振るつた。⁽¹⁷⁾

日本織物と両毛鉄道の役員である丹羽長平は、天保一三年群馬県山田郡広沢村の織物買次商の家に生まれ、一四才から家業に従事し、地元の両毛鉄道、日本織物の創設に関与した。⁽¹⁸⁾

小名木川綿布と富士製紙の村田一郎は鹿児島県人であり、日本橋掘留に店舗を有し、昭和一二年八〇余才で長逝した。⁽¹⁹⁾

以上の複数企業の役員の経歴をみると多くは老舗の経営者であり、家業関連部門に名を連ねるばかりでなく異業種部門の役員にも関わっている。とくに、家業関連部門へ関与した場合は、設立発起に参加し主導的立場に立つ傾向のあったことを指摘できよう。

さらに、これらの商人役員のうち、明治二〇年七月発行の「三府五港」に名前を挙げられているのはつぎの九名で

ある。五〇万円以上の資産家に入っているのは日本橋区掘留町の呉服太物問屋の小林吟治郎（近江商人）、菊池長四郎、佐羽吉右衛門、紀州有田の醬油・塩商の出身で、上京後日本橋区小網町に広屋なる醬油食塩問屋を開いた浜口吉右衛門の四名であり、二〇万円以上は道運業の吉村甚兵衛、一〇万円以上の資産家には柿沼谷蔵、この一覽表では株式仲買と記され、二十四年当時は今村銀行の頭取である今村清之助、同じく「一覽表」で米商と記されている洪沢喜作、それに原亮三郎と淺野繪一郎の五名である。以上によって、東京府下においては日本橋界隈の老舗の商家を以てめとして、呉服太物、糸類、紙、酒、醬油、水油、米、砂糖、塩、茶、薬、銅、鉄、材木等の伝統的商品を扱ってきた商人のなかに、会社形態を採用し、共同企業を創立し、家業と無関係の新事業にさえ資金を投じる者が出現しつつあったことを確認できよう。

次に老舗商人による新企業創設の具体的事例として鐘紡の場合を採りあげてみよう。周知のように明治一七、八年頃中国綿の取扱をめぐって新旧両派が対立していた東京練綿問屋組合員のうち、三越綿店、荒尾亀次郎、奥田小三郎、山本三四郎、下村正右衛門（大丸）、大村和吉郎（白木屋）等の中国綿の取扱を推進しようとする新派は、鐘紡の前身である明治二〇年二月一三日開業した資本金一〇万円の東京綿商社を結成した。その発起人である石井祐二郎・鐵形豊三郎・山本三四郎の三人が、呉服太物商である越後屋三越得右衛門と白木屋大村和三郎を正副頭取に頂いて設立し、同商社は同年四月十日の株主総会で資本金百万円の鐘ヶ淵紡績所を設立することになり、社名を二一年八月から鐘淵紡績会社に改名した。⁽²⁾その発起人は「郵便報知新聞」（明治二〇年四月一二日）によれば以下の通りである。

氏名

家業

家業出典

三越得右衛門

呉服太物商

『日本全国商工人名録』（明治一五年版）

大村和二郎

呉服太物商

『日本全国商工人名録』（明治二五年版）

山岡 正次 三越呉服店

絹川太一 『本邦綿絲紡績史』 第四卷四五四頁

山本三四郎 綿 商

『日本紳士録』(明治二十二年)

欽形豊三郎

石井祐二郎

奥田 小三郎 呉服木綿問屋

『東京木綿呉服問屋組合連盟』(近江商人郷土館所蔵)

荒尾 龜二郎 綿 問 屋

『日本紳士録』(明治二十五年)

このように鐘紡は東京の繰綿問屋と繰綿問屋を兼営する呉服太物商による家業関連企業設立の一例であるが、三井は創立時から深く関与していた。頭取の三越得右衛門は、三井元之助の次男高信(明治四年生)のことであり、養子となつて明治一六年三越得右衛門家を相続し、二六年三越得右衛門は三井に復帰して連家加入して三越家の財産を大元方へ引き渡している。一方、明治一〇年から三井の東京呉服店の改称である三越得右衛門を名乗っていた養父の大井小助は実家の大井信吉方へ復籍し、その後さらに山岡家を再興して山岡正次となつた。紡績機械購入のため谷口直貞が渡英した時、奥田小三郎とともに随行したのは三越得右衛門代理である山岡こと大井信吉であり、機械購入予算三万五千元を上回る四二万五〇〇〇円の価格を承認して新鋭リング機の購入を決断したのは山岡であつた。鐘紡払込不能株全部を三井が引き受けることになつたのも山岡に負うている。東京綿商社、鐘紡の実権は十代後半の若い頭取三越得右衛門や二二、三歳であつた副頭取大村和吉郎ではなく、三越呉服店の事実上の主宰者であり、三井の代理人である山岡の手中にあつたのである。二三年の不況による鐘紡の経営危機に際し、山岡を処分したのは二二年から大村に代わつて副社長に就任していた三井組の総取締西邑虎四郎であつた。こうした事実をもつてすれば、鐘紡の創立は繰綿問屋の手になるものであり、鐘紡は二三年の再建以後三井系の色彩を濃くして行くというよりも、鐘紡の創

5表 京都府下設立企業 16社

企業名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株) 京都商工銀行	京都	19 ^年 9	50.0 ^円	12 ^人
(株) 伏見銀行	伏見	21. 2	10.0	5
(株) 福知山銀行	福知山	20. 5	3.0	8
(株) 京都織物	京都	20. 5	45.0	7
(株) 第一絹糸紡績	京都	20. 3	25.0	8
(株) 関西貿易	京都	20. 5	25.0	5
(株) 京都電燈	京都	20.11	20.0	8
(株) 京都倉庫	京都	20. 4	5.0	8
(株) 京都陶器	京都	20. 5	5.55	7
(株) 淀川汽船	伏見	20. 5	3.75	6
(株) 京都花園火葬	京都	21.10	1.0	5
(資) 京都製糸	京都	20. 4	3.0	3
(資) 西陣織	京都	20. 7	3.0	1
(資) 嵯峨木材	嵯峨	20. 9	1.2	3
(株) 京都三條千本運送	京都	19. 9	0.5	2
(株) 三盛織物	与謝郡	20. 8	0.3	2

立それ自体、江戸期きつての老舗三井による紡績会社創立と見なしてよいであらう。

三 京都府下の動向

京都府において当該期間に設立された企業は5表のように一六社である。これらの企業の役員延数は九〇人であり、純数では七五人である。また、商人役員の延数は五六人（府外者は大阪の松本重太郎一人）、純数は五〇人であるので、六六・七％は商業を営んでいる役員である。役員のかなかに商人として明確に把握できるものが含まれていない企業は京都花園・嵯峨木材の二社にすぎない。6表をみると商人役員の多い業種は、銀行、紡績・織物の縦関係、商社・倉庫・運輸の流通関係が目立っている。それも西陣織物や丹後縮緬に関連した業種を中心とする企業設立として特色づけられる。

次にこの時期に府下で設立された企業の人的側面を、二社以上の役員を兼ねている六人の人物についてみてみよう。京都商工銀行と京都倉庫の役員である市田理八は、近江屋

6表 京都府商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
西村治兵衛	西陣織物卸商	(株)京都商工銀行
市田理八	諸呉服卸商	(株)京都商工銀行・(株)京都倉庫
山中利右衛門	関東呉服卸商	(株)京都商工銀行
大原直次郎	関東呉服卸商	(株)京都商工銀行
山添直治郎	洋反物商	(株)京都商工銀行・(株)京都陶器
竹花嘉兵衛	太物卸商	(株)京都商工銀行
沢田直七	染呉服卸商	(株)京都商工銀行
江崎権兵衛	材木商	(株)伏見銀行・(株)淀川汽船
伊東熊夫	茶製造販売	(株)伏見銀行
築山三郎兵衛	清酒醸造	(株)伏見銀行
菱本伝右衛門	米穀商	(株)伏見銀行・(株)淀川汽船
吉田三右衛門	和洋鉄銅商	(株)福知山銀行
片岡久兵衛	呉服太物商	(株)福知山銀行
佐藤治兵衛	呉服和洋反物商	(株)福知山銀行
高木重兵衛	呉服和洋反物商	(株)福知山銀行
関利兵衛	売薬商	(株)福知山銀行
佐藤勘兵衛	呉服太物商	(株)福知山銀行
磯野小右衛門	米穀商	(株)京都織物
中井三郎兵衛	和洋紙商	(株)京都織物
辻川新三郎	西陣織物商	(株)京都織物
渡辺伊之助	西陣織物仲買	(株)京都織物
稲垣藤作	縮緬卸商	(株)第一絹糸紡績
片山茂三郎	木綿太物商	(株)第一絹糸紡績
阿部彦太郎	米穀砂糖肥物問屋	(株)第一絹糸紡績
野橋作兵衛	縮緬卸商	(株)第一絹糸紡績
古田利助	丹後縮緬呉服商	(株)第一絹糸紡績・(資)京都製糸
今井喜七	染呉服卸商	(株)第一絹糸紡績
山田定七	関東呉服卸商	(株)関西貿易
中村栄助	鹽節油商	(株)関西貿易・(株)京都倉庫
河合太兵衛	生絹卸商	(株)関西貿易
大沢善助	時計製造商	(株)京都電燈
古川為三郎	紙商	(株)京都電燈
荒川宗助	生糸商	(株)京都電燈
松居庄七	半襟呉服商	(株)京都電燈
膳平兵衛	魚鳥問屋	(株)京都電燈
村田六之助	塩商	(株)京都電燈

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向(末永國紀)

堀五郎兵衛	油	商	(株)京都倉庫
竹村弥兵衛	洋反物卸	商	(株)京都倉庫
小泉新助	織物	商	(株)京都倉庫
小藤井孫六	書籍	商	(株)京都陶器
岡本治助	蚕業	糸商	(株)京都陶器
高橋万次郎	醬油	商	(株)淀川汽船
石垣太助	醬油	商	(株)淀川汽船
脇伊兵衛	油砂糖肥料	商	(株)淀川汽船
富山新右衛門	薪炭	商	(株)淀川汽船
中村忠兵衛	丹後縮緬卸	商	(資)京都製糸
松本重太郎	舶来羅紗卸	商	(資)京都製糸 (大阪府東区平野町)
今西平兵衛	博多織	商	(資)西陣紋織
西川正兵衛	煙管	商	(資)京都三条千本運送
江原徳右衛門	縮緬製造販	売	(資)三盛一織物販売一

註. 営業種の出典: 『日本三府五港資産家一覽』・『商工人名録』・『日本紳士録』・『明治人名録Ⅱ』・『京都府議會歴代議員録』等。

()は府外居住所。

の屋号を持つ市理と呼ばれる関東呉服卸商であり、後述のように京都商工銀行の発起人である。⁽²⁸⁾ 洋反物商の山添直治郎は京都商工銀行の役員であり、京都陶器の設立発起の役員である。⁽²⁹⁾ ともに伏見銀行と淀川汽船の役員であり、創設者でもある伏見の江崎権兵衛と菱本伝右衛門の両名のうち、近江屋の商号を持つ江崎は、清酒醸造と材木商を業とする伏見の老舗であり、同地の商工界の総帥である。菱本は米穀商を営んでいる。⁽³⁰⁾ 吉田利助は第一絹糸紡績・京都製糸の役員を勤める京都の丹後縮緬兼生糸商である。関西貿易と京都倉庫の中村栄助は、代々の油問屋兼蠶節商家に嘉永二年出生し、一三歳にして父に従い近畿北陸東山道において商業の実地訓練を受け、同志社に学び、京都政界で活躍し、明治二一年、府會議員を辞して渡米し、貿易事業を実地に視察し、帰国後も市會議員、府會議員、衆議院議員となった。⁽³¹⁾ 京都商人の場合、繊維類・清酒醸造・材木・米穀・油といった伝統的な商品を取り扱う商人の共同企業への出資と参加を認めることが出来る。

またこの時期に、府下で設立された企業の役員には京都政界で活躍した人々が目を引く。なかでも田中原太郎・浜岡光哲・内貴甚三郎が主唱者となって設立されたものが多い。たとえば、京都

7表 田中・浜岡・内貴による創立企業

企業名	発起人・創立委員名
京都商工銀行	田中源太郎・浜岡光哲・内貴甚三郎・竹村弥兵衛・市田理八・藤原忠兵衛 西村治兵衛・山中利右衛門・井上利助
京都倉庫	田中源太郎・浜岡光哲・市田理八・竹村弥兵衛・上野弥一郎・堀五郎兵衛
関西貿易	田中源太郎・中村栄助・山田定七・上野榮三郎
京都織物	浜岡光哲・内貴甚三郎・中井二郎兵衛・渡辺伊之助・高木齊造
京都陶器	田中源太郎・浜岡光哲・内貴甚三郎・山添直治郎・高木齋蔵
京都電燈	田中源太郎・畑道名・高木文平・尾島定七・中村栄助・古川為三郎・富田半兵衛・西村七三郎・矢島作郎（東京）・佐畑信之（神戸）・三木弥七（神戸）

註. 出典：京都商工銀行の発起人（三浦豊二編『沿革史 京都商工銀行』大正6年、19-20頁）、
京都倉庫株式会社の発起人（三浦豊二編『田中源太郎翁伝』昭和9年、81頁）、
関西貿易合資会社の発起人（三浦豊二編『田中源太郎翁伝』昭和9年、89頁）、
京都織物株式会社の創立委員（『京都織物株式会社五十年史』昭和12年、10-18頁）、
京都陶器株式会社の創立取締役（『日出新聞』明治20年5月21日）、
京都電燈株式会社の発起人（『京都電燈株式会社五十年史』昭和14年、11-12頁）。

商工銀行・京都倉庫・関西貿易・京都織物・京都陶器・京都電燈の各企業の発起人あるいは創立委員は7表に示す通りである。

東京電燈の三人を除いて、すべて地元京都の出身者である。田中源太郎の生家は丹波亀岡の商号を袋屋と称する龜岡藩の御用達商人であり、維新後は金貸業を営む大地主である。若年から府会議員として政治活動をするかたわら、

明治一七年京都株式取引所を創立して頭取となり、同年龜岡銀行も創立し、一九年から二〇年にかけて京都商工銀行、京都倉庫、京都陶器、関西貿易、京都織物、北海道製麻の創立の衝にあたっている。後年にいたるも各種の銀行会社の重役を兼任し、二三年以後衆議院議員を歴任している。

田中の従弟あたる浜岡光哲は、京都大覚寺の坊官を生家とし、維新後は京都御所勤務の浜岡家の養嗣子となり、一五年京都商工会議所の創設に加わり、副会長から会長となり、京都取引所・京都商工銀行・京都倉庫・京都陶器・京都織物の創立に参加してその重役となっている。内貴甚三郎の兄は内貴清兵衛という、京都東洞院御池上ルにおいて銭屋

松方デフレ期以後の商人資本の全開的動向（末永國記）

の屋号で諸呉服卸商を営む有力な呉服商人である。内貫甚三郎は京都取引所・京都商工銀行・京都織物・京都陶器の創立に関与し、後に京都市長となっている。⁽³⁵⁾

この三人と共に表示の六社の創立に参加した商人は、つぎのような商品を取り扱っている。⁽³⁶⁾ 関東呉服卸(市田理八・山中利右衛門・山田定七)、西陣織物卸(西村治兵衛)、西陣織物仲買(渡辺伊之助)、木綿太物卸(藤原忠兵衛・井上利助)、洋反物卸(竹村弥兵衛・山添直治郎)、和洋紙(中井三郎兵衛・古川為三郎)、糸物商(児島定七)、糸練物業(富田半兵衛)、糸商兼油商(堀五郎兵衛)、質商(西村七三郎)、油兼鹽節(中村榮助)である。創立時には西陣はじめ織物業関係の商人が多数を占めていたのであり、二八年時点でも役員構成に大きな変化のなかったことがわかる。

商人役員のうち、「三府五港」の五万円以上の資産家に挙げられているのは次の一五名である。すなわち、野橋作兵衛(縮緬卸商)・岡本治助(産養生糸商)・阿部彦太郎(米穀砂糖肥物問屋、近江商人)・市田理八・大原直次郎(関東呉服卸商)・小泉新兵衛(小泉新助の京店名、関東呉服卸商、近江商人)・渡辺伊之助・稲垣藤兵衛(縮緬卸商)・「商工人名」では稲垣藤作となっている)・西村治兵衛・西村総左衛門(西陣織物卸商)・山中利右衛門(近江商人)・竹花嘉兵衛(太物卸商)・藤原忠兵衛・片山茂十郎(木綿太物商)・磯野小右衛門(製紙業、米商)・膳平兵衛(魚鳥問屋)が挙げられていて、老舗の織物関係の商家が企業設立に参加したことを知ることができる。

またこの期間、郡部においても、地元有力商人を核とした企業新設がみられる。前述したように伏見の清酒醸造兼材木商江崎権兵衛と米穀商菱本伝右衛門は伏見銀行と淀川汽船を創立した。弘化四年福知山に生まれた吉田三右衛門は、町年寄役、本陣、口長を勤めた後、地元の商人を糾合して福知山銀行を創立してその頭取となり、二三年の貴族院議員に互選された大地主兼和洋鉄鋼商である。生糸縮緬をはじめ諸種織物を扱う商社三盛合資会社の設立者江原徳

右衛門は、与謝郡三河内村の庄屋であり、丹後縮緬を製造販売する機屋である。⁽⁴⁰⁾

なお、当該期間に設立された企業の役員のうち、明治三一年九月調べの「大地主表」に名前の載っている者は、田中源太郎・吉田三右衛門・牧磯五郎の三人のみである。その他に地主役員としては、福知山銀行の役員である天田郡の芦田鹿之助、加佐郡の大庄屋で蚕業も営んでいる京都倉庫の上野弥一郎、それに紀伊郡藤森神社の社人で大庄屋であった京都陶器の寺内計之助の名前が見いだされる。これに北桑田郡山国村の山林地主であり、北桑銀行・嵯峨木材を設立し、諸種の商業活動も行った河原崎義雄を加えても、この期間の京都府下の地主による企業設立活動は、商人に比較すると低調であった。

四 大阪府下の動向

8表をみれば大阪府下には六七社が設立され、その地域は大阪市内とそれに隣接する西成郡に設置された企業が多い。繊維部門には金巾製織、摂津紡績、浪華紡績、平野紡績、内外綿等資本金五〇万円を越える大資本の企業が多く、繊維部門以外で資本金が五〇万円を越えているのは大阪鉄道と大阪電燈の二社のみである。資本金不明の個人企業を含めた四四社は、資本金五万円以下の規模と考えてよく、とくに煉瓦、洋紙類、燐寸、硝子等の新しく導入された日用品関係の企業には小資本ないし個人企業が多い。

これらの企業の役員延数三〇二人、重複を除いた純数は9表のように二四七人である。商人役員の延数は一九三人、純数では一四三人である。商人役員の割合は純数で五七・九%となる。商人役員の加わっていることの明かな企業は五四社（八〇・六%）である。役員となつてゐる商人の営業種別を多い順にみると、繊維関係が三七人でもっとも多く、ついで米穀・肥料商一七人、医薬関係一三人、藍商一人、それに紙商、清酒関係、砂糖商の各八人の順である。

8表 大阪府下設立企業 67社

企 業 名	成 立 地	設 立 年 月	資 本 金	役 員 数
(株) 大阪共立銀行	大 阪	20.11	30.0 ^百	5
(株) 大阪割引	大 阪	19.11	5.0	5
(資) 加島銀行	大 阪	21.1	10.0	3
(個) 湖亀銀行	大 阪	21.10	5.0	1
(株) 金巾製織	西 成 郡	21.6	200.0	8
(株) 撰津紡績	西 成 郡	22.4	100.0	7
(株) 浪華紡績	西 成 郡	20.4	81.25	10
(株) 平野紡績	平野郷町	20.6	50.0	6
(株) 天満紡績	西 成 郡	20.3	15.0	8
(株) 朝口紡績	西 成 郡	22.4	37.5	8
(株) 桑原紡績	嶋下郡	20.1	2.568	5
(株) 天満織物	西 成 郡	20.3	16.0	8
(株) 大阪燃糸	西 成 郡	20.1	15.0	5
(株) 内外綿	大 阪	20.8	50.0	6
(株) 共同木綿	炭和田	21.8	1.5	4
(株) 日本生命保険	大 阪	22.9	30.0	9
(株) 大阪鉄道	西 成 郡	21.3	300.0	11
(株) 岸和田海陸運輸	岸和田町	21.1	0.2	5
(株) 大阪船渠	西 成 郡	19.12	3.0	5
(株) 大阪造船	西 成 郡	20.10	1.5	6
(株) 大阪電燈	大 阪	22.5	80.0	7
(株) 大阪糖業	大 阪	22.4	6.0	5
(株) 共立物産	大 阪	22.3	10.0	5
(株) 大阪麦酒	嶋下郡	20.12	40.0	5
(株) 堺酒造	堺 市	21.8	10.0	5
(株) 撰津製油	西 成 郡	22.5	20.0	7
(株) 岸和田製油	岸和田町	21.6	0.8	5
(株) 大阪セメント	西 成 郡	19.1	15.0	7
(株) 岸和田煉瓦	岸和田町	20.7	1.4	7
(株) 旭煉瓦	堺 市	19.6	1.25	6
(株) 大阪薬品試験	大 阪	21.4	1.0	7
(株) 大阪時計製造	西 成 郡	22.12	30.0	8
(株) 大阪盛業—ブラシー	西 成 郡	21.10	10.0	5
(株) 三平—鉛—	西 成 郡	22.10	10.0	5
(株) 大阪紙	大 阪	21.4	2.0	7
(株) 日本藍	大 阪	20.12	1.0	5

(株)	浪花活版製造所	大阪	20.4	0.84	5
(株)	大阪帳簿製造	大阪	20.10	1.0	5
(株)	大阪競壳	大阪	21.10	1.25	5
(株)	低石	大阪	20.1	1.0	6
(株)	日本牧牛	西成郡	22.5	2.0	5
(株)	大阪屠蓄	西成郡	20.6	1.0	5
(株)	大阪貨物	大阪	21.5	0.8	5
(株)	大日本養兔	東成郡	20.12	0.5	7
(株)	旭樟一樟腦一	和泉郡	21.6	0.8	4
(資)	大阪商況新報	大阪	19.10	0.207	2
(資)	製硝	西成郡	22.8	3.0	1
(資)	大阪煉瓦石	西成郡	20.4	0.8	4
(資)	五木鉾山	大阪	22.7	2.8	1
(資)	永進一紙一	西成郡	21.6	2.0	1
(資)	大阪藍	大阪	20.10	2.0	3
(名)	商栄一玉簾一	西成郡	21.10	3.0	1
(個)	薬石新報社	大阪	22.10	—	1
(個)	小野鉄工所	大阪	21.1	—	1
(個)	大井製鑠所	大阪	20.10	—	1
(個)	燐寸製造所弘陽館	西成郡	20.2	1.5	1
(個)	泰興舎一燐寸一	西成郡	19.10	—	1
(個)	山本燐寸工場	西成郡	21.6	—	1
(個)	国嶋友禅製造販売所	大阪	20.4	—	1
(個)	一岸和田土族授産場	岸和田町	20.5	0.8	5
(個)	幸英館一丹鑿一	西成郡	22.11	—	1
(個)	五成舎一耐火煉瓦一	西成郡	21.2	1.0	1
(個)	若井煉瓦石工場	堺市	21.9	—	1
(個)	鳥田硝子製造所	西成郡	21.9	—	1
(個)	三好硝子製造所	西成郡	21.4	—	1
(個)	尾崎石鹼製造所	西成郡	19.4	—	1
(個)	大阪阿部製品所-ペンキ-	西成郡	22.4	—	1

彼らの取り扱ってきた商品には輸入品と競合、代替関係にあるものが多い。その危機感が参加企業分野を、家業関連部門に限らず、鉄道、セメント、電燈、船渠、保険といった新たに勃興した産業にまで拡張させた背景にある。

また表示の役員的人的側面を考察するために、三社以上の企業に参加している次の○人の商人役員の経歴を見てみよう。織維関係の営業者では、松本重太郎の名が大阪共立銀

9表 大阪府商人役員一覽

氏名	營業種	役員參加企業
金沢仁兵衛	米穀肥物問屋	(株)大阪共立銀行・(株)摂津紡績 (株)平野紡績・(株)摂津製油 (株)大阪セメント
田中市太郎	干 鱈 商	(株)大阪共立銀行・浪華紡績・摂津製油
松本重太郎	舶來羅紗卸商	(株)大阪共立銀行・(株)内外綿・(株)大阪麦酒 (株)堺酒造・(株)大友盛業—ブラシー
岡崎栄次郎	木綿太物卸商	(株)大阪割引・(株)摂津紡績
今西彦三郎	木綿太物卸商	(株)大阪割引・(株)朝日紡績
谷 宇 七	足袋小売商	(株)大阪割引
吉原善右衛門	大和綿織木綿卸商	(株)大阪割引
種谷善兵衛	染地木綿卸商	(株)大阪割引
広岡信五郎	両 替 商	(資)加島銀行
広岡久右衛門	両 替 商	(資)加島銀行
湖亀治郎七	貿易商・綿ネル製造商	(株)湖亀銀行・(株)朝日紡績
阿部周吉	麻 布 商	(株)金巾製織
小泉新助	織 物 商	(株)金巾製織 (近江国神崎郡朝日村)
阿部市太郎	呉 服 卸 商	(株)金巾製織
中村治兵衛	呉 服 商	(株)金巾製織
阿部市郎兵衛	米穀肥料商	(株)金巾製織・(株)浪華紡績・(株)内外綿 (個)大阪阿部製造所—ペンキー
下郷傳平	米油肥料商	(株)金巾製織・(株)大阪電燈
山中利右衛門	呉 服 卸 商	(株)金巾製織・(株)天満織物
平野平兵衛	洋総糸紡績糸卸商	(株)摂津紡績
伊藤九兵衛	洋 反 物 商	(株)摂津紡績
竹尾治右衛門	呉 服 卸 商	(株)摂津紡績・(株)天満紡績・(株)大阪鉄道
岩田惣三郎	洋総糸紡績糸卸商	(株)摂津紡績
田中市兵衛	肥 物 商	(株)摂津紡績・(株)浪華紡績 (株)大阪セメント
増野邦吉	和 紙 商	(株)浪華紡績
阿部彦太郎	米及砂礫肥物貯受問屋	(株)浪華紡績・(株)内外綿
金沢仁作	肥 物 商	(株)平野紡績
矢辺清兵衛	藍 商	(株)平野紡績・(株)日本藍
岡橋治助	太物染地金巾卸商	(株)天満紡績・(株)天満織物 (株)日本生命保険・(株)大阪鉄道

竹田忠作	呉服商	(株)天満紡績・(株)日本生命・(株)大阪鉄道
永井仙助	質商	(株)天満紡績
池田仁左衛門	洋纈糸紡績糸卸商	(株)天満紡績
浮田桂造	売薬商	(株)天満紡績・(株)内外綿・(株)大阪鉄道
野田古兵衛	諸紙卸商	(株)天満紡績・(株)天満織物・(株)大阪鉄道 (株)大阪電燈・(株)大阪時計製造
日野九右衛門	薬種製造販売	(株)朝日紡績
今西林三郎	回漕問屋	(株)朝日紡績
和田保次郎	白木綿卸商	(株)朝日紡績・(株)大阪換糸
高橋守太郎	荷受問屋	(株)朝日紡績
中村惣兵衛	纈糸卸商	(株)朝日紡績
原憲助	貸金業	(株)桑原紡績
水落義平	時計商	(株)桑原紡績
菱谷清兵衛	团扇商	(株)天満織物
和井田佐七	洋反物卸商	(株)天満織物
千草安兵衛	洋反物卸商	(株)天満織物
西尾宗七	洋反物卸商	(株)天満織物
秋馬新三郎	繰綿商	(株)大阪撚糸・(株)内外綿
斎藤善徳	足袋商	(株)大阪撚糸
中野太右衛門	木綿商	(株)内外綿
鴻池善右衛門	両替商	(株)日本生命
弘世助三郎	紙問屋	(株)日本生命・(株)大阪鉄道
泉清助	株式仲買	(株)日本生命
貴田孫次郎	蠟問屋	(株)大阪鉄道
亀岡徳太郎	足袋装束商	(株)大阪鉄道・(株)大阪電燈
烏井駒吉	清酒醸造	(株)大阪麦酒・(株)堺酒造
肥塚与八郎	清酒醸造	(株)大阪船渠・(株)堺酒造
覚野楠太郎	膏物商	(株)岸和田海陸運輸
久住政七	紡績糸商	(株)岸和田海陸運輸
八木千之助	米商会所仲買	(株)大阪船渠
谷崎新五郎	米穀問屋	(株)大阪船渠・(株)大阪セメント
田中清三郎	藍商	(株)大阪造船
北島孫七	藍商	(株)大阪造船
斎藤徳三郎	藍商	(株)大阪造船
大井卜新	薬種医術機械商	(株)大阪電燈・(株)大阪時計製造
岩崎利兵衛	砂糖商	(株)大阪糖業

岩崎定三郎	砂糖	卸商	(株)大阪糖業
藤田新吉	砂糖	商	(株)大阪糖業
石田庄七	砂糖	仲買	(株)共立物産
山本藤左衛門	砂糖	卸商	(株)共立物産
小西藤楠	砂糖	卸商	(株)共立物産
山口利兵衛	砂糖	卸商	(株)共立物産
宅徳平	清酒	醸造	(株)大阪麦酒・(株)堺酒造
石崎喜兵衛	清酒	醸造	(株)大阪麦酒・(株)堺酒造
志方勢七	糠肥	料商	(株)摂津製油
相尾五郎右衛門	油	商	(株)摂津製油
辻忠右衛門	質	商	(株)摂津製油
大浦弥三兵衛	諸油	卸商	(株)摂津製油
木谷七平	肥物	商	(株)岸和田煉瓦
広海惣太郎	肥料	米穀商	(株)岸和田煉瓦
寺田甚与茂	清酒	醸造	(株)岸和田煉瓦・岸和田一族授産場
金納源十郎	酒類	商	(株)岸和田煉瓦
芝田大吉	仲買	商	(株)岸和田煉瓦
黒田吉三郎	土管	製造商	(株)旭一煉瓦一
黒田喜平	呉服	商	(株)旭一煉瓦一
河盛新兵衛	木綿	商	(株)旭一煉瓦一
小寺幸次郎	薬種	卸商	(株)大阪薬品試験・(獨)幸栄館—丹磐—
田辺五兵衛	薬種	卸商	(株)大阪薬品試験・(株)日本牧牛
武田長兵衛	薬種	卸商	(株)大阪薬品試験
田畑利兵衛	薬種	卸商	(株)大阪薬品試験
石津作次郎	薬種	商	(株)大阪薬品試験
日野九郎兵衛	薬種	卸商	(株)大阪薬品試験
宗田友次郎	薬種	卸商	(株)大阪薬品試験
石原久之助	時計	商	(株)大阪時計製造
芝川又右衛門	質商・書籍	商	(株)三平一和—
鈴木惣七	和紙帳面	商	(株)大阪紙
政岡徳兵衛	紙	商	(株)大阪紙
奥田藤兵衛	諸紙	問屋	(株)大阪紙
門田利助	和洋紙	問屋	(株)大阪紙
浜田甚兵衛	米穀	問屋	(株)大阪紙
中尾友治郎	蠟燭	商	(株)大阪紙
秋山多吉郎	諸国荷	受業	(株)日本藍

山口政兵衛	砂糖卸商	(株)日本藍
遠藤定兵衛	藍商	(株)日本藍
田中喜兵衛	藍商	(株)日本藍
中川多助	木綿卸商	(株)浪花活版製造所
増岡重太郎	菓子商	(株)浪花活版製造所
岸井六左衛門	吹子製造商	(株)浪花活版製造所
赤松美矩	舶來品商	(株)浪花活版製造所
古岡又十郎	桐木材木商	(株)大阪帳簿製造
中村安右衛門	荷受商	(株)大阪帳簿製造
大崎代吉	舶來雜貨商	(株)大阪競売
藤本清七	米穀商	(株)大阪競売
吉田利兵衛	洋紙商	(株)大阪競売
沢井幸助	砥石商	(株)砥石
小山弥一郎	打刃物商	(株)砥石
藤井吉右衛門	砥石商	(株)砥石
大村清五郎	砥石商	(株)砥石
加藤幸次郎	砥石商	(株)砥石
米本善兵衛	砥石商	(株)砥石
白井松之助	藥種卸商	(株)日本牧牛
上村長兵衛	和漢洋藥品卸商	(株)日本牧牛
塩野宗三郎	藥種卸商	(株)日本牧牛
浅井竹五郎	美濃万古陶器商	(株)淡陶
櫻田栄次郎	陶器商	(株)淡陶
櫻田倉藏	陶器卸商	(株)淡陶
橋本兼次郎	皮革商	(株)大阪屠殺
安井弥吉	牛肉商	(株)大阪屠殺
正木善七	段通製造商	(株)大阪貨物
播本孝良	金庫製造販売	(株)大阪貨物
近藤喜兵衛	藍商	(株)大阪貨物
森本喜助	蠟燭商	(株)大阪貨物
久次米定助	量表商	(株)大阪貨物
鳴戸嘉七	酢製造商	(株)大日本養兔
平野忞兵衛	酒商	(株)大日本養兔
岸村徳平	木綿問屋	(株)共同木綿・岸和土族授産場
高橋与三郎	白米小売商	(株)旭樟
松内太助	織物商	(株)旭樟

二川鹿之助	米商会所仲買	(株)大阪商況新報
進藤嘉一郎	米商会所仲買	(株)大阪商況新報
駒井庄太郎	硝子器ランプ商	(資)製硝
伊藤定吉	煉瓦商	(資)大阪煉瓦石
椿本莊助	藍商	(資)大阪藍
永井利兵衛	藍商	(資)大阪藍
山田作二郎	藍商	(資)大阪藍会社
木村小兵衛	海産物商・綿商問屋	泰興舎
岡嶋千代造	モスリン友禅染製造卸商	岡嶋友仙製造販売所
左納権一	清酒醸造商	岸和田土族授産場
三好鹿造	硝子商	三好硝子製造所

註、宮衆種の出典：『日本三府五港豪商資産家一覧』・『海軍人名録』・『日本紳七録』・『人事興信録』・『明治人名辞典Ⅱ』・『大阪現代人名辞書』・『大阪経済史料集成』・『本邦綿絲紡績史』・『日本生命百年史』・『帝國實業家立志編』・『實業家百傑伝』・『商界英雄伝』・『実業人傑伝』・『財界物故傑物伝』等。

()は附外居住所。

行・内外綿・大阪麦酒・堺酒造・大阪盛業・の五社に見られる。松本は弘化元年丹後國竹野郡問入村の農業松岡龜右衛門の次男に生まれ、一〇歳から京都の呉服商菱屋勘七方で三年間奉公し、ついで大阪の太物問屋の綿屋利八家の奉公人となり、二四歳で独立し、舶来物品の営業を開始した。明治一一年大阪第百三十国立銀行の発起人となったのを手始めに、金融、鉄道、諸工業の創設や幹旋等、実業界の多方面で尽力した。松本は右の五社のうち、大阪共立銀行・大阪麦酒の発起人の創立者であり、内外綿は発起人ではないが、創立時の取締役である。その他この時期に創立された大阪の大阪電燈・大阪織布(明治二〇年創立、二三年大阪紡績に吸収)、神戸の山陽鉄道、京都の京都製糸の発起人となっている。二四年当時は第百三十銀行頭取、大阪紡績頭取・阪堺鉄道社長である。

竹尾治右衛門は摂津紡績・天満紡績・大阪鉄道の役員であり、安政元年摂津国川辺郡の農家坊向勘兵衛の長男として生まれ、明治六年、縁戚関係にあった大阪の呉服商竹尾家の養嗣子となり、十代目竹尾治右衛門を称した。竹尾は紡績業に関心を持ち、発起人ではなかったものの、明治三年創立半年後の摂津紡績

の取締役となり、二九年から二〇年間同社社長の職にあつた。また二二年には大阪鉄道の常務委員（取締役）に就いている。⁽⁴⁵⁾

天満紡績・大阪鉄道・天満織物・日本生命保険に名前を見いだすことができる岡橋治助は、文政七年奈良県磯城郡の農家の次男に生まれ、貧家の家計を雑貨行商により補っていたが、天保一三年一九歳の時大阪北葦屋町の烏屋商店（商号島忠、福井忠三郎経営）に入店、木綿太物販売に従事し、安政四年独立して同商売により成功した。天満紡績の発起人にして同社初代社長であり、大阪鉄道・日本生命の発起人であり、両社の創立時の検査役である。⁽⁴⁶⁾ 二四年当時は第三十四国立銀行頭取、天満紡績社長であつた。

大阪で「いとや」呉服店を営む竹田忠作は、天満紡績・日本生命・大阪鉄道の役員を兼ねている。⁽⁴⁷⁾

米穀問屋兼肥料商の金沢仁兵衛は大阪共立銀行・摂津紡績・平野紡績・撰津製油・大阪セメントの五社に名を連ねているが、出身は阿波であり、金沢卯兵衛の養子となり、金沢仁作の養兄となつた。大阪商船の副社長であつた二一年、請われて平野紡績の社長となり、二三年には竹尾治右衛門と一緒に撰津紡績の取締役に就いている。⁽⁴⁸⁾ 二四年当時は大阪共立銀行頭取、平野紡績社長、大阪凌疏通社長である。

南本町に米穀肥料商を開業している阿部市郎兵衛は内外綿・金巾製織・浪華紡績・大阪阿部製造所―ペンキ製造―の役員であるが、元来は天保八年生まれの近江商人であり、近江国神崎郡能登川の紅染麻布の製造販売を業とする伯父の養子となり、阿部家の七代目市郎兵衛を嗣いだものである。大阪の米商阿部彦として高名であつた天保一一年生の阿部彦太郎は従弟にあたる。⁽⁴⁹⁾ 市郎兵衛は浪華紡績と金巾製織の発起人であり、金巾製織の初代社長である。そのほか明治二〇年、近江で企図された日本製絨の発起人でもある。彦太郎は浪華紡績・内外綿と大阪電燈の発起人であり、二四年当時は内外綿の社長の地位にあつた。

摂津紡績・摂津製油・大阪セメントの役員の出中市兵衛は天保九年大阪の肥料商田中市兵衛の長男に生まれた。大阪商船の発起人を初め運輸業・金融業等実業界で活躍する一方、明治二〇年以後第十一議會まで大阪第一区選出の衆議院議員であった。阪堺鉄道創立時の取締役であり、摂津紡績では二三年相談役に就いている。⁽³⁰⁾二四年当時は第四十二国立銀行頭取である。大阪共立銀行・浪華紡績・摂津製油の役員の出中市太郎はこの市兵衛の嗣子である。慶応元年大阪に生まれ、一六才から家業に従業し、父の創立した各会社にはすべて重役として参加している。⁽³¹⁾

練葉の「五龍門」で知られた売薬製劑業の浮田桂造は内外綿・天満紡績・大阪鉄道の役員であるが、弘化三年、大和巨子市郡池ノ内村の梅咲善六の次男に生まれた。⁽³²⁾一三歳で浮田家に奉公し、その養子嗣となり明治四年家業を継いで桂造を襲名した。浮田は天満紡績創設時の発起人取締役であり、また大阪鉄道では発起人として創設以来の常議員(取締役)である。

二四年当時、大阪東区今橋に蔡倫商社という資本金三〇〇〇円の諸紙販売会社の社長であった紙卸商の野田吉兵衛⁽³³⁾は、天満紡績・大阪鉄道・天満織物・大阪電燈・大阪時計製造の役員である。吉兵衛は尾張國中島郡馬引村の農業野田伊佐衛門の次男として弘化二年に生まれ、安政元年一〇歳のとき大阪の商家奉公に入り、一八歳になって同地で呉服太物商を営んでいた叔父の養嗣子となった。野田は天満紡績創立時の発起人取締役であり、天満織物については株式買収により二四年同社社長となった。また大阪鉄道の発起人であり創設時には検査役に就き、大阪電燈・大阪時計製造の発起人である。⁽³⁴⁾

また、商人役員のうち、「三府五港」に名前を挙げられている者は、織維関係では松本重太郎・岡崎栄次郎・中村治兵衛・平野平兵衛・岡橋治助・山中利右衛門・秋馬新三郎の七人である。米穀・肥料商では金沢仁兵衛・田中市兵衛・志方勢七・浜田甚兵衛・逸藤嘉一郎の五名であり、為替業・質商では広岡久右衛門・永井仙助・辻忠右衛門・芝

川又右衛門（書籍商兼業）、藍商としては矢辺清兵衛・椿本莊助・永井利兵衛、売薬商では浮田桂造・武田長兵衛、紙商は野田吉兵衛・政岡徳兵衛、それに清酒釀造商石崎喜兵衛と蠟商の貴田孫次郎および畳表商の久次米定助を加えた計二六名である。さらに、これらの五万門以上の豪商と目された人々のうち、秋馬新三郎・金沢仁兵衛・田中市兵衛・志方勢七・浜田甚兵衛・阿部市郎兵衛・広岡久右衛門・辻忠右衛門・芝川又右衛門・浮田桂造・石崎喜兵衛・武田長兵衛の一二名は大阪市内における先代以来の旧家である。⁽⁵⁵⁾

以上の考察から、大阪府下において、当核期間に設立された企業の商品役員には二つの類型のあったことを指摘できよう。一つは松本重太郎・岡橋治助・野田吉兵衛に代表されるような、幕末に商家奉公を経験し、変革期の波に乗って商略を発揮し、多方面の新企業の創立経営に関係するようになった商人達である。いま一つは、長年の蓄積資本を新企業へ振り向けて脱皮を図った竹尾治右衛門・金沢仁兵衛・田中市兵衛・阿部市郎兵衛・浮田桂造に代表される老舗の商人達である。

移植産業である大阪電燈・天満紡績の發起人の顔ぶれをみても、約半数は商人ないし商業関係者であったことは次に掲げる通りである（営業・役職欄は『商工人名録』等による）。

大阪電燈会社發起人

氏名	住所	営業・役職等	氏名	住所	営業・役職等
鴻池善右衛門	大阪	第十三国立銀行頭取	貴田孫治郎	大阪	蠟問屋
住友吉左衛門	大阪	鉱山業	門田利助	大阪	和洋紙問屋
広瀬幸平	大阪	右、住友の代人	山口幸七	大阪	第七十九国立銀行取締役
芝川又右衛門	大阪	質商・書籍商	井上仁兵衛	大阪	——

奥村利三郎	大阪	舶来物品引取商	田中丑松	大阪	洋反物卸商
山口吉郎兵衛	大阪	横浜貿易商	下郷傳平	大阪	製紙業
西田永助	大阪	(右、山口の後見人)	玉手弘通	大阪	大阪石油会社社長
阿部彦太郎	大阪	米穀砂糖肥物問屋	松本重太郎	大阪	舶来羅紗卸商
豊田文三郎	大阪	——	田中市兵衛	大阪	肥物商
野田吉兵衛	大阪	諸紙卸商	土井通夫	大阪	大阪電燈社長
泉由次郎	大阪	——	藤田伝三郎	大阪	藤田組頭取—鉾山採掘—
龟岡徳太郎	大阪	足袋装束商			

天満紡績發起人

氏名	住所	営業・役職等	氏名	住所	営業
岡橋治助	大阪	太物染地金巾卸商	中村取八	大阪	——
浮田桂造	大阪	売薬業	紅谷卯兵衛	大阪	——
竹田忠作	大阪	第二百一十一国立銀行頭取	渡辺庄助	大阪	両替商
野田吉兵衛	大阪	諸紙卸商	山口善五郎	大阪	雑業
村上嘉兵衛	大阪	銀行業	烏田覚人	大阪	——
池田仁左兵衛	大阪	洋総糸紡績糸卸商	糸谷忠造	大阪	——
伊丹古兵衛	大阪	——			

(出典…『明治人正大阪市史』第二卷七、二頁)

なお大阪府下のこの期間の地主の企業設立活動を「大地主表」によってみると、そこに名前のある役員は、阿部彦太郎・岡橋治助・芝川又右衛門や岸和田の清酒醸造業者寺田甚与茂、泉南郡貝塚の肥料米穀問屋広海惣太郎の他には、岡田銀行の役員である泉南郡四信達村の亀岡平兵衛がいるのみである。

五 兵庫県下の動向

10表に掲示したように、兵庫県下において設立された企業は五一社である。業種でみると、もっとも多いのは銀行であり、一五行にのぼる。資本金一〇万円台は四行であり、他はすべて七万円以下、三万円―一万円が五行という小規模な銀行が多い。設立地はほぼ全県下にまたがっている。鉄道、海運、輸出商社など運輸・貿易関係の企業も一〇社設立されているのは港湾都市としての神戸を反映している。次いで多いのは繊維部門で、紡績・織物・製糸関係の八社である。在来産業の酒造業では四社設立されている。その他、製塩、農業、燐寸等にも零細な企業が設立されている。兵庫県の場合、総じて企業設立が郡部にまで広がりを見せていることを窺うことができる。

役員延数二八二人、純数二五六人、うち商人役員は延数一三三人、重複一七人を除くと商人役員純数は一〇六人（県外者は一五人）、四一・四%である。11表によってその主な営業種は、酒造関連商二五人、米穀・肥料関係が一人、呉服・太物・糸商の繊維関係一二人、醤油醸造・塩問屋六人等であり、売込商・引取商の貿易関係者も七人いることが知られる。役員在任企業は比較的家業関連部門が多い。最多数の役員を出している酒造関連商は盛航・摂州灘興業・日本撰酒などに名を連ね、米穀・肥料商が米穀輸出・委託、肥料販売を業務とする日本米穀や、運輸部門の和田倉庫、兵庫運送、兵庫船橋に関係し、汽船問屋は神戸送迎、繊維関係の商人は姫路織物や姫路紡績・出石生糸に

10表 兵庫県下設立企業 51社

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株)神 戸 銀 行	神 戸	20.2	10.0 ^{万円}	6 ^人
(株)兵庫共融銀行	神 戸	22.1	6.0	6
(株)淡路銀行	三原郡	22.5	10.5	7
(株)梁瀬銀行	朝来郡	22.2	10.0	7
(株)豊岡銀行	豊 岡	20.9	10.0	7
(株)赤穂銀行	赤 穂	21.11	10.0	10
(株)佐治銀行	水上郡	20.12	7.0	8
(株)殖産銀行	朝来郡	22.7	5.0	10
(株)大屋銀行	養父郡	20.7	5.0	6
(株)尼崎銀行	尼 崎	22.5	5.0	6
(株)成松銀行	水上郡	21.6	3.0	9
(株)福本銀行	神東郡	21.6	3.0	6
(株)三田銀行	三 田	22.9	3.0	10
(株)竜野銀行	竜 野	22.1	2.5	5
(株)西谷銀行	養父郡	22.10	1.0	10
(株)山陽鉄道	神 戸	21.1	1300.0	13
(株)日本精米	神 戸	20.9	40.0	6
(株)神戸電燈	神 戸	21.9	30.0	5
(株)日本米穀	神 戸	20.12	20.0	5
(株)和出倉庫	神 戸	22.10	15.0	5
(株)盛 航—海運—	神 戸	20.7	10.0	5
(株)明治工業—土木建築—	神 戸	21.10	3.0	5
(株)神戸送迎	神 戸	22.12	2.5	5
(株)兵庫運送	神 戸	20.9	1.4	5
(株)兵庫船橋	神 戸	22.4	1.0	5
(株)姫路織物	姫 路	20.7	1.0	5
(株)尼崎紡績	尼 崎	22.6	63.0	6
(株)摂州灘興業—海運—	御 影	20.3	23.0	6
(株)江井ヶ嶋酒造	明石郡	21.6	11.0	5
(株)姫路紡績	飾 東 郡	21.5	10.0	6
(株)口本撰酒	西 宮	20.8	8.0	5
(株)播陽精米紡績	飾 磨	21.11	6.0	6
(株)関西煉瓦	明石郡	21.1	6.0	5
(株)伊保酒造	印南郡	22.8	5.0	7
(株)西宮企業—酒造販売—	西 宮	22.5	3.0	6
(株)出石生糸	出 石	20.7	2.0	9

(株) 業 蚕 郡 西 飾	郡 郡 西	21.5	2.0	3
(株) 牛 蠶 郡 西 飾	郡 郡 西	22.7	0.558	5
(株) 油 醬 原 柏	郡 郡 原	20.12	0.5	5
(株) 一 業 農 統 栄 神	郡 郡 東	22.8	0.246	6
(株) 一 貿 易 糸 生 栄 神	郡 郡 戸	20.1	15.0	—
(株) 材 石 山 龍	郡 郡 南	22.3	0.5	—
(共) 引 所 取 品 外 米 戸 神	郡 郡 戸	20.11	0.6	11
(資) 塩 製 塩 大	郡 郡 南	21.1	5.0	1
(資) 一 寸 燐 燐 明	郡 郡 石	19.11	1.0	1
(資) 類 魚 山 篠	郡 郡 山	22.4	0.1	5
(資) 一 寸 燐 清 日	郡 郡 崎	20.8	0.55	—
(名) 塩 製 原 梶	郡 郡 南	21.4	—	3
(個) 一 糸 製 同 共 上 水	郡 郡 上	22.5	—	2
(個) 所 船 造 崎 川	郡 郡 戸	19.5	—	1
(個) 場 糸 製 岡 丸	郡 郡 多	20	—	1

加わっている。

これらの商人役員の人的側面を考察するために、重複して企業の役員となつている県内の一人一人を抽出してみよう。神戸銀行と神戸米外五品取引所の山本亀太郎は、弘化四年大阪の茶商の家に生まれ、一五才から家業に従事し、神戸の茶貿易の有望を見通して明治六年頃神戸に出店し、茶貿易によって神戸を代表する茶売込商となり、神戸港からの茶輸出の振興に務め、新興の貿易商として明治二〇年神戸商法会議所の発起人に名を連ねている。⁽⁵⁸⁾

神戸銀行・神戸米外五品取引所の児島長四郎は、安政四年摂津国八部郡二ツ茶屋村（後の開港場神戸町）の米穀商を営む豪家の七代目として生まれ、明治二〇年の取引所条例の発布と同時に株式組織の神戸取引所の設立に尽力した。⁽⁵⁹⁾

神戸電燈・和田倉庫・神戸米外五品取引所の池田貴兵衛は、天保一三年伊予国喜多郡新谷村に生まれ、親族池田家の養子となり、立身の機会を求めて長崎から横浜を経て神戸に來住し、この間の商館勤務を生かして銅・樟腦・製茶を売込む神戸の新興貿易商として台頭した。池田は神戸電燈の発起人であり、二〇年の神戸商法会議所の発起人、⁽⁵⁸⁾二三年設立の神戸商業会議所の理事になつている。二四年当時は神戸

11表 兵庫縣商人役員一覽

氏名	營業種	役員參加企業
山本 龟太郎	製茶壳込商	(株)神戸銀行・(共)神戸米外五品取引所
小嶋 長四郎	米穀商	(株)神戸銀行・(共)神戸米外五品取引所
西田 仲右衛門	取引所仲買	(株)神戸銀行
永田 平四郎	製茶壳込商	(株)神戸銀行
西口 清助	製茶壳込商	(株)神戸銀行
大村 佐七	金銭貸付	(株)兵庫共融
湯野 常七	酒類商	(株)兵庫共融
十川 龟太郎	金物小売商	(株)兵庫共融
田治米三郎右衛門	酒造商	(株)梁瀬銀行
佐川 義右衛門	雜商	(株)豊岡銀行
西垣 勘治郎	生糸商	(株)豊岡銀行
原 庄七	生糸麻苧商	(株)豊岡銀行
杉本 和兵衛	醬油醸造商	(株)豊岡銀行
橋本 久治郎	清酒醸造商	(株)豊岡銀行
遠藤 安治郎	柳行李卸商	(株)豊岡銀行
西垣 幸三郎	古着商	(株)豊岡銀行
辰馬 喜十郎	清酒醸造商	(株)日本撰酒
紅野 平左衛門	清酒醸造商	(株)日本撰酒
藤田 卯三郎	清酒醸造商	(株)日本撰酒
奥藤 研造	製塩商	(株)赤穂銀行
柴原 甚三	塩問屋	(株)赤穂銀行
三木 隆治	清酒醸造商	(株)赤穂銀行
平田 寛治	藥種商	(株)赤穂銀行
福井 孫平	荒物商	(株)赤穂銀行
田淵 新作	塩商	(株)赤穂銀行
神谷 与兵衛	酒造商	(株)殖産銀行
北村 孫右衛門	酒造商	(株)殖産銀行
奥田 古右衛門	生塩干魚問屋	(株)尼崎銀行
川口 平三郎	肥料干鰯糠塩問屋	(株)尼崎銀行
中塚 弥平	絞油繰綿商	(株)尼崎銀行
大塚 茂十郎	醬油醸造・塩問屋	(株)尼崎銀行
荻野 善五郎	質商	(株)成松銀行
古積 政七	金物商	(株)成松銀行
田中 庄三郎	絞油商	(株)成松銀行
有田 孫八郎	酒造商	(株)成松銀行
堀 吉太郎	酒造商	(株)福本銀行

奥谷七兵衛	酒造商	(株)三田銀行
松田市右衛門	金物商	(株)三田銀行
末広茂吉	醤油醸造・呉服太物商	(株)竜野銀行
松本重太郎	舶来羅紗商	(株)山陽鉄道 (大阪, 東区平野)
今村清之助	両替商	(株)山陽鉄道 (東京, 芝, 田町)
田中市兵衛	肥物商	(株)山陽鉄道・(株)姫路紡績 (大阪, 西区, 鶴)
難波二郎三郎	薬種医学機械洋酒商	(株)山陽鉄道・(株)関西塩瓦 (岡山, 西大寺町)
井上保次郎	両替商	(株)山陽鉄道 (大阪, 東区, 北浜)
範多龍太郎	諸機械製造販売	(株)日本精米
池田貫兵衛	貿易諸物品売込商	(株)神戸電燈・(株)和田倉庫 (共)神戸米外五品取引所
宇都宮壮十郎	製蠟商・海産物商	(株)神戸電燈 (愛媛, 川之石町)
沢野定七	米穀商	(株)神戸電燈・(株)日本米穀 (共)神戸米外五品取引所
柏木庄兵衛	米穀肥料委託問屋	(株)日本米穀・(株)兵庫船橋
沢田清兵衛	米穀委託問屋	(株)日本米穀・(共)神戸米外五品取引所
阿部彦太郎	米穀砂糖肥物荷受問屋	(株)日本米穀 (大阪, 北区, 堂島浜)
有馬市太郎	肥料商	(株)日本米穀・(株)和田倉庫・(株)兵庫船橋 (共)神戸米外五品取引所
川西清兵衛	石油引取商	(株)和田倉庫・(株)兵庫船橋
深沢富右衛門	金物仲買商	(株)和田倉庫
辰栄之助	清酒醸造	(株)盛航一海運一
河東利助	清酒醸造	(株)盛航一海運一
中川栄治郎	汽船問屋	(株)神戸送迎
安堂善助	汽船問屋	(株)神戸送迎
大森栄助	汽船問屋	(株)神戸送迎
田中儀助	汽船問屋	(株)神戸送迎
中井平次郎	旅人宿	(株)神戸送迎
泉谷文七	輸出米穀仲買	(株)兵庫運送・(共)神戸米外五品取引所
武谷亀三	米穀仲買	(株)兵庫運送
辰巳忠兵衛	米穀仲買	(株)兵庫運送
佐野松左衛門	和洋鉄金物商	(株)兵庫運送
栗賀仁兵衛	米穀仲買	(株)兵庫運送
浦上金一郎	木綿手拭商	(株)姫路織物
水野伊造	汽船代理店	(株)姫路織物
亀岡徳太郎	足袋装束商	(株)尼崎紡績 (大阪, 南区, 順慶)
広岡信五郎	両替商	(株)尼崎紡績 (大阪, 西区, 土佐堀)
坂上新五郎	魚問屋	(株)尼崎紡績 (大阪, 西区, 京町堀上)
牧野惟雄	酒造商	(株)撰州灘興業一海運一

説田 彦 助	清 酒 間 屋	(株) 摂州灘興業 海運一 (東京、京橋、南新堀)
嘉納 治兵衛	清 酒 醸 造	(株) 摂州灘興業一海運一
高橋 門兵衛	清 酒 間 屋	(株) 摂州灘興業一海運一 (東京、京橋、銀座)
卜部 兵吉	清 酒 醸 造	(株) 江井ヶ嶋酒造
卜部 八兵衛	酒 類 商	(株) 江井ヶ嶋酒造
米沢 長 衛	酒 造 商	(株) 江井ヶ嶋酒造
田口 政五郎	清 酒 醸 造	(株) 江井ヶ嶋酒造
三宅 純 一	清 酒 醸 造	(株) 姫路紡績・(株) 播陽精米紡績
浜本 八治郎	洋総糸紡績糸卸商	(株) 姫路紡績・(株) 播陽精米紡績
谷村 又 蔵	米 穀 商	(株) 姫路紡績
辰馬 半右衛門	清 酒 醸 造	(株) 日本料酒
浜田 藤次郎	肥 料 商	(株) 播陽精米紡績
和田 半兵衛	乾物問屋・貿易商	(株) 崗西煉瓦 (大阪、北区、淀川)
志方 勢 七	糠 商	(株) 崗西煉瓦 (大阪、西区、靱南)
金沢 仁兵衛	米 穀 問 屋	(株) 崗西煉瓦 (大阪、西区、靱北)
有岡 太 一 郎	米穀魚類繅綿問屋	(株) 西宮企業一酒造販売一
米座 百太郎	薪 炭 商	(株) 西宮企業一酒造販売一
福 富 達 三	物 品 販 売 商	(株) 出石生糸
武田 喜平治	陶 器 製 造 商	(株) 出石生糸
宮崎 久太郎	陶 器 製 造 卸 商	(株) 出石生糸
志 水 与 三	呉服太物洋反物商	(株) 出石生糸
大橋 又十郎	清 酒 販 売 商	(株) 出石生糸
武田 喜平治	陶 器 製 造 商	(株) 出石生糸
宮崎 久太郎	陶 器 製 造 卸 商	(株) 出石生糸
志 水 与 三	呉服太物洋反物商	(株) 出石生糸
大橋 又十郎	清 酒 醸 造	(株) 出石生糸
吉野 治兵衛	米 穀 商	(資) 明燐一燵寸製造販売一
米村 忠兵衛	魚 市 場 持 主	(資) 篠山魚類
岡田 林 助	生 塩 魚 類 商	(資) 篠山魚類
鈴木 重治郎	呉服和洋反物商	(資) 篠山魚類
梶原 正之助	塩 商	(名) 梶原製塩
藤木 安兵衛	白米売込商	(共) 神戸米外五品取引所
十菱 常七	取 引 所 仲 買	(共) 神戸米外五品取引所
村上 鉄之助	取 引 所 仲 買	(共) 神戸米外五品取引所

註. 営業種の出典: 『商工人名録』・『都道府県別資産家地主総覧』・『商工業者資産録』・『兵庫縣人物列伝』・『兵庫縣史』・『神戸市史』・『足崎市史』・『姫路市史』・『三原郡史』・『成松町誌』・『西予人物史』・『現代大阪人名辞典』・『京阪神二於ケル事業と人物』

()は県外居住所

取引所の理事長である。

神戸電燈・日本米穀と神戸米外五品取引所の沢野定七は兵庫磯之町の米穀商である。沢野は天保二二年撰津国八郡神戸の代々商売を営む梅谷久四郎の子として生まれた。一二歳で兵庫湊匠町の米穀問屋瓜屋生助家の奉公人となり、二五歳にして番頭に累進し、明治初年の輸入米の取引で商才を発揮した。明治一年兵庫磯之町に初めて米穀仲買店を開くことを許され、一三年米商会所の仲買人となった。また神戸取引所の創立に尽力した。⁽⁵⁹⁾ 日本米穀・神戸米外五品取引所の沢田清兵衛も瓜屋清兵衛という代々の米穀問屋である。⁽⁶⁰⁾

日本米穀・兵庫船橋の柏木庄兵衛は嘉永三年生まれ、兵庫磯之町の米穀肥料委託問屋である。⁽⁶¹⁾ 庄兵衛は、明治二〇年一月、日本米穀輸出会社を米穀委託問屋の沢田清兵衛・泉谷勘七、生塩干魚委託問屋の魚澄惣左衛門、それに黒崎雄二と共に発起設立し、⁽⁶²⁾ 取締役に就いている。⁽⁶³⁾

日本米穀・兵庫船橋・和田倉庫・神戸米外五品取引所の有馬市太郎は、嘉永五年撰津国兵庫の代々肥料仲買の店に生まれた。一四歳で家業を継ぎ、明治一年に兵庫商法会議所が創立されると理事となり、同年神戸区会議員となった。二〇年には、米穀取引所の理事に推され、兵庫船橋の創立に尽くし、取締役に就いた。二二年日本米穀の取締役となり、二二年和田倉庫の前身の石油倉庫株式会社の設立発起人・検査役となった。⁽⁶⁴⁾ 同年の市制施行に際して市会議員となった。二〇年の神戸商法会議所の発起人であり、二三年の神戸商業会議所の発足時には理事に当選している。⁽⁶⁵⁾

兵庫運送・神戸米外五品取引所の泉谷文七は、弘化三年生まれの北宮内の米穀仲買商であり、⁽⁶⁶⁾ 兵庫船橋と和田倉庫の川西清兵衛は、天保一三年に兵庫川崎町の石炭商と倉庫の貸付を営業する屋号「座古清」なる旧家に生まれ、後に貸金業も営んでいる。二四年当時は石油倉庫会社（和田倉庫の前身）⁽⁶⁷⁾ の社長である。また二〇年の神戸商法会議所と二三年の神戸商業会議所の設立発起人となっている。⁽⁶⁸⁾

ともに姫路紡績と播陽精米紡績の役員である三宅純一と浜本八治郎の二人は姫路の最有方商人である。三宅は安政三年の生まれ、清酒醸造商の六代目である。明治二年株式組織に改組された姫路紡績の社長となり、播陽精米紡績の発起人取締役であり、山陽鉄道の発起人でもあった。二二年の市制施行時に市会議長となっている。三九年五〇歳で病没した。⁽⁹⁶⁾ 浜本は屋号を「那波八」という代々の呉服屋であったが、洋総糸紡績糸を扱う綿糸問屋となった。二一年株式改組の姫路紡績の取締役となり、播陽精米紡績の発起人にして専務取締役である。⁽⁹⁷⁾ 貸金業により大地主となり、明治二三年には地租一〇七四円九一錢九厘を納めて兵庫県多額納税者の一人となっている。⁽⁹⁸⁾

「三府五港」の三万円以上の豪産の名には、池田實兵衛・柏木庄兵衛・川西清兵衛・沢田清兵衛の四人があげられているが、いずれも複数の企業の役員となっていることは右にみた通りである。当該時期の企業の商人役員には、酒造・米穀・肥料を扱う老舗の商人と貿易港神戸へ來住した新興貿易商人という新旧商人が合同で名を連ねているのは、当県の一特徴である。このことは二六年の神戸商業会議所の会員の職業別内訳においても同傾向が指摘されている。⁽⁹⁹⁾

兵庫県の企業の場合、この二八年の調査時点での役員に大阪、東京を中心とする県外の大商人一五人の参加が目立っている。松本重太郎・今村清之助・田中市兵衛・井上保次郎・難波二郎三郎の名前がみえる山陽鉄道、亀岡徳太郎・広岡信五郎・坂上新五郎の名前のある尼崎紡績、あるいは宇都宮莊十郎の参加している神戸電燈のような大企業だけでなく、日本米穀、摂州灘興業、姫路紡績、関西煉瓦にも説田彦助・高橋門兵衛・田中市兵衛・志方勢七・金沢仁兵衛・和田半兵衛の名前を見ることができる。神戸港の整備と共に新開地の将来性が大都市資本の投資を呼び込んだのである。しかし二八年の役員の名前に兵庫県人を見つけない山陽鉄道や尼崎紡績にも、その創立の発起人には以下のように当地の商人が多数参加している。（営業・役職欄は『商工人名録』、「三府五港」、『二チボー75年史』、「神戸又新日報」明治二十二年五月二日等による）

山陽鐵道發起人

居住地 氏名 營業・役職

県下 美濃郡 石田貫之助 県会議長

加東郡 近藤常三郎 地主

菟原郡 山村太左衛門 清酒醸造

飾京郡 岡崎真鶴 士族

神戸 光村弥兵衛 貿易商

西宮 辰馬吉左衛門 清酒醸造

明石 米沢長衛 地主

武庫郡 髯尾久太郎 清酒醸造

居住地 氏名 營業・役職

県下 印南郡 伊藤長次郎 地主

伊丹 小西新右衛門 清酒醸造

加東郡 高瀬藤次郎 県会議員

竜野 三宅純一 清酒醸造

大阪府 大阪 藤田伝三郎 鉱山業

東京府 東京 莊田平五郎 三菱社員

東京府 東京 九鬼隆義 華族

神奈川県 横浜 原六郎 銀行業

尼崎紡績發起人

居住地 氏名 營業・役職

尼崎 中塚東助

河合善吉 本咲利一郎家番頭

伊達尊親 醤油醸造

小坂忠平 醤油醸造

米沢喜行 旧桜井藩士

居住地 氏名 營業・役職

大阪 岡田長左衛門 古着商

広岡信五郎 両替商

小寺幸次郎 和漢洋薬種卸商

湖亀治良七 湖亀銀行頭取・貿易商

橋本清兵衛

- | | | | |
|--------|-------------|-------|-------------|
| 八木新助 | —— | 野村利兵衛 | 木綿太物商 |
| 松本仁平 | —— | 今西彦三郎 | 木綿太物卸商 |
| 梶鶴之助 | 肥料塩石灰商 | 川上利助 | 川上銀行頭取 |
| 平林昌伴 | 旧桜井藩主 | 西尾喜輔 | —— |
| 飯井佐吉 | 材木商 | 伊藤又兵衛 | 白木綿卸商 |
| 亀井吟平 | 繰綿綿実油製造・鋸造 | 巽隆藏 | —— |
| 橋本古右衛門 | 肥料商 | 川田豊七 | 木綿太物卸商 |
| 井沢忠平 | 醬油醸造 | 木原忠兵衛 | 木原銀行頭取 |
| 三浦市三郎 | 醬油醸造 | 辻龍助 | —— |
| 田中七平 | 酒樽巻菰繩造商 | 鴻池又吉 | 鴻池新十郎長男 |
| 寺岡五良平 | 米穀肥料糠商・醬油醸造 | 福本元之助 | 両替商逸見家次男 |
| 村松秀致 | 旧桜井藩士 | 高木嘉兵衛 | 艾火口荒物商・酒類商 |
| 三浦長平 | —— | 川田斎助 | 第百国立銀行大阪支配人 |
| 奥田古右衛門 | 生塩干魚問屋 | | |
| 中塚弥平 | 絞油製造商・繰綿問屋 | | |
| 川口平三郎 | 肥料干蠟糠塩商 | | |
| 大塚茂十郎 | 醬油醸造・三塩問屋 | | |
| 本咲利一郎 | 地主 | | |

梶源左衛門 地主

武庫郡 中田半三郎

川辺郡 井関勘十郎

武出三衛

(出典：「尼崎紡績会社創立願」)

山陽鉄道の発起人一六人のうち、兵庫県は二人であり、最初に開通した神戸―姫路間の沿線地域の清酒醸造業者五人が加わっている。また、尼崎紡績四五人の発起人のうち、二七人は兵庫県側から出ている。なかでも尼崎の醤油醸造業者と肥料商は計一〇人の上っている。大阪側は私立銀行頭取やその同族という金融業者の六人と木綿太物商等の織維関係者の五人が突出している。兵庫県下の企業の設立や役員には清酒・醤油等の醸造業者と米穀・肥料商の活躍が目立つといつてよいであろう。

いま一つ付言すれば、山陽鉄道・尼崎紡績の創立に少なくとも各々二人づゝの地主の参加が確認されるように、当県下の企業の創立・役員構成には地主層を無視できない。12表は「大地主表」⁽¹³⁾によって、地主の企業役員への参加状況をみたものである。三六人の地主が一九の企業の役員となっている。日下安左衛門・鎌田三郎兵衛は三社、吉井庄左衛門・本咲利一郎は二社の役員を兼任している。当該時期の企業創立に地主資本の動員を十分に考えることができ。ただ創立に参加した地主層は、農業のみを基盤とする地主ではなく、朝来郡の梁瀬銀行の田治米吉郎右衛門、赤穂銀行の奥藤研造、神東郡福本銀行の堀吉太郎、有馬郡三田銀行の奥谷七兵衛、明治工業の米沢長次郎、江井ヶ嶋酒造の米沢長衛、伊保酒造の伊藤長次郎等のように、地主を主としながら他方で酒造業・肥料商や蚕糸業等の商業活動⁽¹⁴⁾を行い、商品流通にも手を染めながら耕地集積を図る存在であったことは、留意されなければならないであろう。

12表 兵庫県「大地主表」記載の役員

氏名	役員参加企業
印部俊平	(株)淡路銀行
野上嘉平	(株)淡路銀行
仲野久太郎	(株)淡路銀行
口下安左衛門	(株)梁瀬銀行・(株)大屋銀行・(株)畜牛
田次米吉郎右衛門	(株)梁瀬銀行
安積春次	(株)梁瀬銀行
石原栄	(株)梁瀬銀行
佐川義右衛門	(株)豊岡銀行
西垣勘治郎	(株)豊岡銀行
原庄七	(株)豊岡銀行
奥藤研造	(株)赤穂銀行
田淵新作	(株)赤穂銀行
浜本弥七郎	(株)赤穂銀行
中嶋与兵衛	(株)佐治銀行
北村孫右衛門	(株)殖産銀行
太田垣義亮	(株)殖産銀行
鎌田三郎兵衛	(株)大屋銀行・(株)西谷銀行・(株)畜牛
吉井庄左衛門	(株)大屋銀行・(株)畜牛
本咲利一郎	(株)尼崎銀行・(株)尼崎紡績
荻野善五郎	(株)成松銀行
山本新助	(株)成松銀行
安田丞右衛門	(株)成松銀行
鶴野金平	(株)福本銀行
堀占太郎	(株)福本銀行
原六郎	(株)山陽鉄道
阿部彦太郎	(株)日本米穀
米沢長次郎	(株)明治工業 土木建築一
嘉納治兵衛	(株)摂州灘興業一海運一
米沢長衛	(株)江井カサ酒造
伊藤長次郎	(株)伊保酒造
中谷与吉郎	(株)伊保酒造
伊達忠太郎	(株)伊保酒造
武田喜平治	(株)出石生糸
宮崎久太郎	(株)出石生糸
川口木七郎	(株)飾西蚕養業
梶原貞太郎	(名)梶原製塩

六 新潟県下の動向

13表によれば日本海側で唯一対象となった新潟県の設立企業は九社であり、県北部を除く新潟市以南に拡散して設立されている。ただ企業規模は資本金一万円以下の零細な企業が五社あり、ついで三〜六万円規模が二社、最大は資本金六〇万円の日本石油である。業種は運送関係三社、石油採掘会社二社、商事二社等であるが、とくに明治二〇年

13表 新潟県下設立企業 9社

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株) 益一貸金一	中魚沼郡	20.7	0.043 ^千	3 ^人
(株) 日本石油	三島郡	21.2	60.0	7
(株) 名立谷石油	西頸城郡	20.12	6.0	6
(株) 新潟倉庫	新潟	20.8	5.0	5
(株) 大川津倉庫	三嶋郡	21.9	0.6	6
(株) 柏崎浮船	柏崎	22.3	0.06	5
(株) 高田材木	直江津	22.4	0.3	6
(株) 直江津盛塩	直江津	19.3	0.8	5
(株) 信慶商会一薬品一	高田	21.6	1.25	3

一二月に名立谷石油会社、二二年二月には日本石油会社が設立され、この地方の油田開発の始まっていることが注目される。⁽⁷⁾

これらの九社の役員延数四六人、うち重複は廻船問屋の牧口莊三郎一人であるから役員純数四五人、商人役員延数は一九人なので、純数は一八人である。商人役員の比率は四〇・〇%となる。14表に示すように、役員になっている商人はいずれも県内居住者であり、その家業の内訳は、醤油・清酒醸造商六人、米穀・肥料商三人、廻船問屋と薬種商各々二人等であり、主に家業関連部門の企業に名を連ねている。新潟倉庫に米穀卸商二人、大川津倉庫に醤油・清酒醸造商三人、柏崎浮船に廻船問屋と四十物仲買、食塩・米穀・肥料・海産物を扱う直江津盛塩には蠟砂糖油綿卸商と米穀肥料の取扱商人が参加しているといった具合である。特に港湾関係の企業が目立つのは、江戸時代から日本海側の中継商業港として発達してきた新潟の特性を体現したものと云える。⁽⁷⁾ そうした新潟商人の代表は、柏崎浮船と日本石油の役員を兼ね、唯一人兼任役員となっている牧口莊三郎である。牧口は亨和元(一八〇二)年柏崎の荒浜に出生し、佐渡や近海の米穀輸送から事業を開始し、数隻の五百石積和船による北海道と瀬戸内の買積船経営に事業を拡大して成功した。明治一二年の第一回県会議員選挙に刈羽郡から当選し、日本石油の創立には発起人として参加し、役員理事に選出されている。⁽⁷⁾

14表 新潟県下商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
内藤久寛	酒造商	(株)日本石油
山口万吉	和洋小問物商	(株)日本石油
牧口莊三郎	廻船問屋	(株)日本石油・柏崎浮船
坂口七平	石油製造商	(株)名立谷石油
鈴木長八	廻船問屋	(株)新潟倉庫
小沢三七郎	米穀卸商	(株)新潟倉庫
近藤幸四郎	米穀卸商	(株)新潟倉庫
本間弥平治	醤油醸造	(株)大川津倉庫
柳下安兵衛	醤油醸造	(株)大川津倉庫
本間健四郎	清酒醸造	(株)大川津倉庫
外山与五郎	荒物商	(株)大川津倉庫
西巻時太郎	醤油醸造・廻船問屋	(株)柏崎浮船
池島与吉	四十物仲買	(株)柏崎浮船
矢嶋吉五郎	蠟砂糖油綿卸商	(株)直江津盛塩
前崎久平	米穀肥料商	(株)直江津盛塩
高橋慶治郎	清酒醸造	(株)信慶商会—薬品—
高橋佐助	薬種商	(株)信慶商会—薬品—
池田龍太郎	薬種商	(株)信慶商会—薬品—

氏名 住所 備考

山口権三郎 刈羽郡 県会議員
 山口政治 刈羽郡 山口権三郎実弟
 牧口莊三郎 刈羽郡 廻船問屋

地主、地価三三三三三円

註. 営業種の出典: 『商工人名録』・『人事興信録』・『新潟県宅万円以上実業家資産徳覧』・『大日本商家之源』・『越後人物誌』・『新潟県史』・『西京城郡誌』・『村松町史』・『日本石油百年史』等.

なお、新潟県は名だたる大地主地帯であるが、当該期間の設立企業への地主の役員参加は、次のような状況である。「三府五港」で地価五万円以上と評価され醤油醸造兼廻船問屋を営む西巻時太郎の名前が柏崎浮船にみられ、「大地主表」にいずれも地価一万円台の地主として掲げられている醤油醸造商の柳下安兵衛が大川津倉庫の、清酒醸造商を営んでいる高橋慶治郎が信慶商会の、それぞれ役員となっている。また、日本石油会社の発起人の過半は次のように大地主である。

日本石油発起人

内藤久寛	刈羽郡	県会議員、酒造商、衆議員議員	地主、地価五一〇五六円
飯塚弥太郎	刈羽郡	——	地主、地価二七七八七円
山田順一	刈羽郡	県会議員、柏崎物産社長	地主、地価一五九一三円
大塚益郎	三島郡	県会議員、山口権三郎安弟	地主、地価四一六七三円
高橋九郎	三島郡	——	地主、地価二〇五二〇円
広川莊二	三島郡	——	地主、地価二〇五三七円
久須実秀二郎	三島郡	県会議員	地主、資産五万円以上
遠藤亀太郎	三島郡	——	地主、地価一一八八一円
山口万吉	古志郡	和洋小間物商	地主、地価一三四三〇円
渡辺清松	古志郡	和洋織物商	地主、地価一五八三八円
小松伝作	古志郡	国産絹織物卸商	地主、地価六七五六四円
岸 宇吉	古志郡	唐物商	地主、地価三四一六八円
本間新作	中蒲原郡	——	地主、地価二二三三六円
佐々木松坪	中蒲原郡	——	地主、地価一五六八四円
中野貫一	中蒲原郡	寛政年間以来の石油稼業地主	地主、地価一五六八四円
樋口元周	中蒲原郡	県会議員、中蒲原郡村松町長	地主、地価一五六八四円
西脇国三郎	北魚沼郡	金融会社社長	地主、地価一五六八四円
渋谷初二郎	南蒲原郡	——	地主、地価一五六八四円

(出典…『日本石油百年史』昭和六二年 六〇頁)

〔備考欄は『日本石油百年史』・『感佐人物誌』・『日本現今人名辞典』・『日本全国商工人名録』・「大地主表」・「三府五港」・『新潟県史』通史編7・『新潟県史』資料編15等による。なお牧口の名前を明治二五年版『日本全国商工人名録』は政三郎と誤記している。地価額は円未満切捨)

日本石油の二一人の発起人の内訳は、「三府五港」・「大地主表」に載っている地主二一人、商人は三人、地主兼商人は三人、その他四人である。このうち改進黨に属する県会議員が六人いる。新潟県の地主制の展開状況は明治一九年の段階で、地価額一万円以上(三〇―五〇町歩)の地主は戸数比率〇・二%と全国平均の二倍、その所有地価比率は一八%と全国平均の三倍というように、すでに全同一の地主県であった。⁽⁸⁰⁾日本石油は発起人引受株六六株(一株、千出)のうち最大の一五株を引受た山口権三郎に象徴されるように新潟の地主資本を中心に設立されたことは明かである。ただ最初の役員に選ばれたのは県会議員で酒造業の内藤久寛・県会議員で大地主の山口権三郎・廻船問屋の牧口莊三郎・中蒲原郡の大地主本間新作・唐物商で大地主の岸宇吉であり、地主・県議・商人という発起人の属籍を巧みに組み合わせて理事を選出し、内藤が常務理事(社長)に就任している。⁽⁸¹⁾しかも発起人のなかには明治十九年、「塩谷」事件と呼ばれる石油抗業権をめぐる政府の圧力にも屈しなかった中野貫一も参加しており、資産と名望を兼ね備えた人々による石油採掘会社の発足は、明治二五年前後にこの地方に簇生する石油の掘削精製販売会社設立の先鞭をつけることになった。⁽⁸²⁾

七 群馬県下の動向

群馬県では15表のように銀行関係四社、織維関係二社、その他馬車鉄道、製氷、林業、劇場の計一〇社が設立され

15表 群馬県下設立企業 10社

企業名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株)伊勢崎銀行	伊勢崎	21.10 ⁽⁴⁾	8.0 ⁽¹⁾	5 ^(A)
(株)吾妻銀行	中之条	19.12	5.0	7
(名)沼田産業—銀行業—	沼田	22.7	1.0	4
(株)太田蚕振—貸金—	太田	21.3	4.0	8
(株)赤城湖水—水—	前橋	21.4	1.0	5
(株)前橋紡績	東群馬郡	22.7	20.0	2
(資)上毛熱糸	南勢多郡	21.6	0.43	7
(個)糸井養林	北勢多郡	20.3	0.3	1
(株)上毛馬車鉄道	前橋	22.4	4.96	5
(株)前橋敷島座劇場	前橋	21.10	0.44	5

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向(末水國紀)

ている。役員延数四九人、重複しているのは県外者の東京株式取引所の中島行孝と神奈川県の富農荻原六郎の二人であるから純数は四七人⁽⁸¹⁾。商人役員延数は二二人であり、中島一人が重複しているので、商人純役員は二〇人、商人役員比率は四二・六%である。16表によつて県内商人役員の業種をみると、呉服太物・生糸・織物といった繊維関係商人と米・雑穀・肥料・油・砂糖・酒を扱う商人に二分され、いずれも伝統的商品分野である。ただ、当県の場合設立された企業は窄細なものが多く、半数の五社は資本金一万円以下である。明治二八年の時点で最大の八万円の資本金を持つ伊勢崎銀行の当初の資本金は五万円であり、創立の中心者五人がそのまま二八年まで役員を継続している。創立者の一人である羽尾勘七家は、享保年間に伊勢崎本町に初代が呉服太物雑貨商を開業して以来「竹屋」を称し、竹屋勘七、通称「竹勘」の商号をもつてきこえた上毛地方の豪商である。幕末期に伊勢崎産綿の買次商として京阪地方への持ち上りを開始し、五代勘七は同業者と共に織物組合の前身である太織会社を創立して綿の品質向上に努めた。また吾妻銀行は、明治一四年に吾妻郡中之条に設立された中之条生産会社の満期解散によつて資本金五万円⁽⁸²⁾で設立された銀行であり、首脳陣もほとんど継続している。頭取となつている田中甚平は米穀紙類商の町田儀平の次男であり、明治一五年以来県会議員に連選され、取締役の田村喜八は中之条の江戸時代から旅宿とし

16表 群馬県商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
小暮英三郎	買次商	(株)伊勢崎銀行
羽尾勤七	呉服太物商	(株)伊勢崎銀行
中沢豊七	肥料塩油穀物商	(株)伊勢崎銀行
下山求平	呉服太物商	(株)伊勢崎銀行
町田儀平	米穀紙類商	(株)吾妻銀行
田村喜八	旅人宿	(株)吾妻銀行
森川勤平	油商	(名)沼田産業
桑原寿平	砂糖紙文具商	(名)沼田産業
加藤東四郎	生糸商	(名)沼田産業
角田危右衛門	菓子製造砂糖商	(名)沼田産業
大塚久右衛門	米雑穀商	(株)太田蚕振
若旅九八郎	生糸商・回漕問屋	(株)太田蚕振
中鳥行孝	株式仲買	(株)赤城湖氷・(株)上毛馬車鉄道 (東京、牛込、市ヶ谷加賀)
下城弥一郎	織物製造商	(資)上毛蒸糸
船津嘉伝治	生糸商	(資)上毛蒸糸
岡田藤三郎	生糸類屑商	(資)上毛蒸糸
奈良軍平	繭仲買生糸製造商	(資)上毛蒸糸
小泉藤助	生糸商	(株)前橋敷島座劇場
小泉茂七	生糸商	(株)前橋敷島座劇場
小平井音吉	生糸商	(株)前橋敷島座劇場

第四六卷 第一号

注、営業種の出典：『商工人名録』・『上毛吾妻百家伝』・『群馬県史』・『富士見村誌』・『糸之瀬村誌』・『伊勢崎市史』・『日本産業金融史研究』等。

()は県外居住所。

て知られた「なべや」の当主である。⁽⁸⁶⁾
 上毛蒸糸の前身は、貿易によってこの地方の生糸も脚光を浴び、農間に生糸繭関係の商取引に従事するものが増加したことを背景にして、明治一五年、生糸の共同販売を目的に高山長次平、船津嘉伝次、品川困造、狩野平吉等によって設立された原盛社であり、同社に注目した下城弥一郎によって、改組設立された会社である。⁽⁸⁷⁾ 下城は、嘉永六年、佐波郡殖蓮村の機業を家業とする家に生まれた。伊勢崎織物の改良に努め、明治一四年に同業団体の伊勢崎太織会社を組織し、数年後、伊勢崎織物同業組合に改め、以後二〇余年間にわたって組合長に在任し、二八年には買継商を開始し、また県会議員も勤め

た人物である。⁽⁸⁸⁾

前橋地方に敷設された上毛馬車鉄道は、重役陣の顔ぶれからみても東京の資本である。二二年設立の前橋紡績は、旧前橋藩士の七族授産事業の一つとして興され、民間絹糸紡績の濫觴といえる懷清社の後身であり、社長の西邑虎四郎は前述のように三井の幹部社員であった。⁽⁸⁹⁾

「大地主表」に載っている地主役員は四名確認できる。小暮英三郎が伊勢崎銀行、大塚久右衛門と若旅九八郎が太田蚕振―貸金―、須田貞太郎が赤城湖水―水―の役員にそれぞれ就任している。このうち、佐波郡の小暮英三郎は県會議員を務めて買次商も営み、⁽⁹⁰⁾大塚久右衛門の生業は太田町の米糶穀商、⁽⁹¹⁾邑楽郡の若旅九八郎は家業の個人金融業と同時に生糸買次商・回漕問屋を営み、⁽⁹²⁾県會議員にもなっている。勢多郡の須田貞太郎は養蚕業を営む素封家であり、明治一二年最初の県會議員に当選した後、家業と関連のある蚕種の貯蔵のための製氷会社である赤城湖水会社を創立して社長となり、上毛馬車鉄道の創設期の取締役に就いている。⁽⁹³⁾当該期の群馬県の企業においては、規模の零細性、県外資本の流入がみられるものの、役員構成面からすれば、⁽⁹⁴⁾県會議員を務めるような名望ある商人層が中心となつて主として生糸織物関連の企業活動が活発であつたと総括できよう。

八 愛知県下の動向

17表に掲示したように設立企業一六社の立地は西部の名古屋周辺を主要地域とし、他は東部の豊橋周辺に若干零細な企業が興されている。⁽⁹⁵⁾業種は資本金一〇〇万円の尾張紡績を別格として、運輸三社・材木建築三社を除くと、他は陶器・醸造・商事等の日常生活関連の零細な企業である。一六社の役員延数八四人、重複者三人、役員純数八一人である。商人役員の確認できるもの延三八人のうち、⁽⁹⁶⁾役員の兼務者は材木商の井上信八と木綿製造商の関幸助の二人で

17表 愛知県下設立企業 16社

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株) 熱 田 銀 行	熱 田	21.11	10,000 ^円	9 ^人
(株) 日 本 共 立 汽 船	熱 田	21.5	25.0	8
(株) 内 海 帆 走 船	知 多 郡	20.1	1.3	6
(株) 愛 船 一 運 輸 一	東 春 日 井 郡	19.4	0.6	5
(株) 尾 張 紡 績	熱 田	20.3	120.0	8
(株) 佐 々 緋	名 古 屋	19.4	1.0	5
(株) 名 古 屋 材 木	名 古 屋	21.12	1.0	5
(株) 尾 州 材 木	名 古 屋	22.4	10.0	5
(株) 陶 栄 一 陶 器 一	常 滑	19.6	3.0	5
(株) 夏 日 製 造 一 味 噌 醬 油 一	知 多 郡	22.1	2.0	5
(株) 豊 橋 魚 鳥	豊 橋	22.10	1.0	4
(資) 名 古 屋 酒 造	名 古 屋	20.9	0.8	3
(株) 愛 北 物 産 一 北 海 道 物 産 一	名 古 屋	20.10	3.0	2
(資) 名 古 屋 建 築	名 古 屋	22.4	5.0	2
(資) 豊 橋 農 具 改 良	豊 橋	21.2	0.3	2
(株) 共 同 尾 白 一 木 綿 雜 貨 一	知 多 郡	22.4	10.0	10

あるから、商人役員純数は四六人、商人役員比率は四四・四%である。県外者は大阪の和鉄銅卸商近藤喜祿一人であり、残り県内居住の三五人の内訳は、18表からわかるように、材木商一人のうち一〇人は材木・建築会社の役員、呉服太物等の衣料品関係商七人のうち五人は紡績・織物会社、酒醸造者五人のうち四人は酒・味噌・醤油の醸造会社の設立というように主として家業関連業種に名を連ねている。その他の金物・小問物・古道具・海産物塩干物等在桌の日常品を扱う商人達は銀行・運輸・紡績といった異業種の役員に分散して名を連ねている。この期の愛知県の設立企業には複数社の役員を併任している商人役員は前記の様に熱田銀行・尾州材木の井上信八と陶栄・共同尾白の関幸助であるが、今その経歴を知ることが出来ない。そこで資本金の最も大きい尾張紡績の創立時の人的関係を見てみよう。尾張紡績の創立当時の役員は次の通りである。

尾張紡績創立時の役員

役職 氏名 営業種

社長 奥田正香 醤油醸造商

18表 愛知県商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
小貝 謙三郎	魚類問屋	(株)熱田銀行
古田 佐兵衛	材木商	(株)熱田銀行
浜野与右衛門	船具商	(株)熱田銀行
服部 孫兵衛	有松絞卸商	(株)熱田銀行
竹内 弥七	酒味淋醸造	(株)熱田銀行
井上 信八	材木商	(株)熱田銀行・尾州材木
堀部 勝四郎	鑿節五十集・蜜柑問屋	(株)日本共立汽船
近藤 喜禄	和鉄鋼卸商	(株)日本共立汽船(大阪, 西区, 立売堀北)
内田五郎兵衛	金物商	(株)内海帆走船
奥田 正香	醬油醸造	(株)尾張紡績
瀧 兵右衛門	呉服卸商	(株)尾張紡績
八木平兵衛	太物金巾卸商	(株)尾張紡績
瀧 定助	呉服卸商	(株)尾張紡績
森本 善七	小問物卸商	(株)尾張紡績
蜂須賀 武輔	味噌溜製造	(株)尾張紡績
春日井文右衛門	呉服太物卸商	(株)尾張紡績
白石 半助	占物占道具商	(株)尾張紡績
伊藤 正太郎	薬糸類商	(株)佐々餅
長谷川 武七	材木兼板白木商	(株)名古屋材木
水谷 又吉	材木商	(株)名古屋材木
横井 伝蔵	材木商	(株)名古屋材木
加藤 金六	材木商	(株)名古屋材木
鈴木 惣兵衛	材木商	(株)尾州材木
牧田 茂兵衛	材木商	(株)尾州材木
吉田 喜七	材木商	(株)尾州材木
今井 覚馬	材木商	(株)尾州材木
関 幸助	木綿製造商	(株)陶栄—陶器—(株)共同尾白—木綿雑貨—
竹村 仁平	陶器商	(株)陶栄—陶器—
夏目 甚七	酒醸造	(株)夏目製造—味噌醬油—
夏目 仲助	酒醸造	(株)夏目製造—味噌醬油—
夏目 平三郎	酒醸造	(株)夏目製造—味噌醬油—
杉田 六江	西洋小問物商	(株)豊橋魚鳥
瀧崎 安之助	海産物商	(株)豊橋魚鳥
佐藤 理助	清酒醸造	(資)名古屋酒造
熊田 彦平治	油販売	(株)愛北物産—北海道物産—
服部 小十郎	材木卸商	(資)名古屋建築

註. 営業種の出典: 『商工人名録』・『名古屋商工人名録』・『尾参農商工繁昌録』・『本邦綿絲紡績史』

()は県外居住所

取締役 森 本 善 七 小問物袋物卸商兼外国貿易商

同 瀧 兵右衛門 呉服卸商

同 八木平兵衛 諸太物金山類卸商

同 近藤友右衛門 和洋綿糸卸商

(出典：絹川太一『本邦綿絲紡績史』第四卷 三二一頁)

創立当時の役員は近藤を除いて全員が二八年まで役員に留まっている。資本金五〇万円で創立されたこの尾張紡績は奥田正香の主唱によるものであり、奥田が森本以下の職維関係の商人資本を糾合して出来たものである。奥田は旧尾州藩士であり、一時、伊勢度会県の火属や大藏省八等出仕の官途に就いたが、やがて名古屋へ帰り味噌屋を営業し県会議員及び県会議長に就くとともに、株式取引所、名古屋電鉄、日本車両、名古屋瓦斯、日本電力等の諸企業を創立した。奥田の呼びかけに応じた取締役の一人瀧兵右衛門の経歴は次の通りである。瀧は、代々呉服問屋を業とする商家の五代目として天保一四年六月一四日名古屋市本町に出生した。尾州藩の御用達商人であったが、明治一五年、瀧定助、春日井丈右衛門、森本善七らと名古屋銀行を創立し自ら頭取となっている。二四年当時、奥田は尾張紡績の社長であり、瀧は名古屋銀行頭取、愛知織物会社頭取である。

明治二〇年前後の名古屋経済界は起業熱が活発であった。すなわち、一八年には岐阜県多治見にあった第四十六国立銀行本店が名古屋に移転し、一九年七月資本金七万円の株式会社名古屋株式取引所が瀧兵右衛門・瀧定助・森本善七等の発起によって設立され(一九二二年一二月解散)、二〇年九月には名古屋電燈株式会社が煙草商三浦忠民等の発起によって設立許可となった。さらに鉄道も一九年には名古屋—武豊間、熱田—名古屋間、一宮—木曾川間等が次々に開業し、一二年には東海道新橋—神戸間の開通を迎えるのである。このような企業機会到来に対する地主層の関与を

みるために、当該期設立の二十社の役員名を「大地主表」と参照すると、九名を見いだすことができる。しかしそのうちの六名は、次に記すように著名な商人である。瀧兵右衛門・瀧定助・春日井丈右衛門・祖父江重兵衛は名古屋を代表する大兵服太物商であり、岡谷惣助は上記のように和洋万金物商、浜野与右衛門は船具商である。愛知県では地主よりも商人、とくに都市部の老舗の商人の投資活動が目を引きと云つてよいであろう。

九 静岡県下の動向

19表が示しているように設立された二〇社のうち、数の上でも、資本金の面でも大きな比重を占めているのは一三社を数える金融業である。なかでも銀行は半数の一〇社を占め、主に東海道筋の宿場町に立地している。その他には零細な商品取引の三社と運送会社二社があるくらいである。

役員延数は一〇二人、うち二人は二社の役員を兼任しているので、役員純数一〇〇人である。そのうち、確認できる商人役員は一七人、兼任者はないので比率では一七・〇％にすぎないものの、全員県内居住者である。20表に則してみると内訳は米穀肥料取扱商が五人、素麵製造商三人、酒・醬油の醸造関係三人というのが主な家業であるが、その役員就任業種は、静岡米穀肥料委託会社を除いて家業との間に特に顕著な相関性は見られない。当県の場合、商人の投資活動の不活発さは、静岡市の城下町商人の投資活動が鈍いことに象徴されているといつてもよい。20表でも呉服商は一名のみ挙がっている。それと対象的に注目されるのは「大地主表」に掲げられている一八人も地主が役員に就いていることである。そのうち一三人が金融業である。商業を営んでいることがはっきりしている地主は、呉服商の谷村藤古、醸造業の山本茂三郎・岡崎平四郎の三人のみである。その他は郡村の居住者であり、町部の嶋田町居住の秋野橋太郎と森淑も三万四〇〇〇円余の地価額の土地を所有している。とくに慶応三年九月一五日に静岡県志太

19表 静岡県下設立企業 20社

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株) 資 産 銀 行	浜 松	21.11	12.0 ^千	5 ^人
(株) 下 田 銀 行	下 田	21. 4	5.65	7
(株) 吉 原 銀 行	吉 原	21.—	11.0	8
(株) 金 谷 銀 行	金 谷	21. 5	7.0	6
(株) 伊 久 美 銀 行	志 太 郡	20.—	3.6	7
(株) 鳥 山 銀 行	鳥 山 郡	19.12	10.0	5
(株) 借 栄 銀 行	静 岡 郡	22. 4	5.0	7
(株) 東 浦 銀 行	田 方 郡	21. 4	3.36	3
(株) 開 成 銀 行	三 嶋 郡	21. 4	2.0	3
(株) 川 尻—銀行業—	榛 原 郡	21. 4	1.1	4
(株) 静岡資産貸付	静 岡 郡	21.11	0.7	5
(株) 中 村 銀 行	城 東 郡	22. 5	2.0	8
(株) 積 志 社—育英事業—	長 上 郡	22. 9	1.0	6
(株) 中 泉 運 送	豊 田 郡	21. 9	1.0	6
(株) 蒲 原 新 水 道	庵 原 郡	22. 1	1.5	5
(株) 静岡米穀肥料委託	静 岡 郡	22. 9	3.0	8
(株) 静 岡 製 糸	静 岡 郡	22. 8	1.0	3
(株) 富士精業—商品売買—	富 士 郡	22.10	1.0	5
(資) 前 嶋 運 送	藤 枝 郡	22. 2	1.0	1
(個) 掛 川 葛 布 商 社	掛 川 郡	21. 1	0.2	3

郡藤枝町で代々農業のかたわら酒醬油の醸造を営む家に生まれた岡崎平四郎は、前島運送の社長であるが、一四年設立の藤枝銀行の専務取締役である。^(四)また、富士郡の牧田佐重郎は吉原銀行と富士精業—商品売買—の役員を兼務するなど、当県では主として銀行業への地主資本の投下に一つの特徴を認めることができる。明治の地方議会では、農商を問わず地方名望家の議席占有率は高いが、静岡県議会でも「明治一二年—二三年県会議員住所生死年月日職業表」によってみると、農業に分類されている議員は八六・三%を占め、^(四)期間を明治一二年から三〇年まで延長しても、農業を職業とする県会議員の割合は八二・四%という依然として高い比率を占めている。^(四)この期の静岡県の政財界は地主の主導下にあったということが出来る。

20表 静岡県商人役員一覽

氏名	営業種	役員参加企業
勝田五右衛門	運送業	(株)下田銀行
西野平四郎	素麵製造商	(株)伊久美銀行
谷村藤吉	呉服和洋反物商	(株)嶋山銀行
小長谷源次郎	素麵製造販売	(株)静岡資産金貸付
松本文七	製茶・肥料・糸・米穀商	(株)中泉運送
神谷惣吉	醤油味噌製造	(株)中泉運送
谷伊兵衛	料理店	(株)蒲原新水道
山本善吉	米穀商	(株)静岡米穀肥料委託
増田市五郎	米穀肥料商	(株)静岡米穀肥料委託
青木松蔵	米穀商	(株)静岡米穀肥料委託
松井惣次郎	米穀商	(株)静岡米穀肥料委託
石原嘉平治	小元兼卸商	(株)静岡米穀肥料委託
山本茂三郎	醤油醸造販売	(株)静岡米穀肥料委託
法月金吾	袋物商	(株)静岡米穀肥料委託
森新七	粉類素麵製造販売	(株)静岡米穀肥料委託
岡崎平四郎	酒醤油醸造・質商	(株)前嶋運送
松本直三郎	和洋紙商	(個)掛川葛布商社

松方テフレ期以後の商人資本の全国的動向(永永國紀)

註. 営業種の出典: 『商工人名録』・『明治人名辞典Ⅱ』・『静岡名士伝』・『静岡県人物志』・『静岡県史史料』・『静岡県議会百年史』・『浜松市史』

十 岡山下の動向

21表にみるように設立された一社の業種のうち、精米は四社、特産の花蘭筵の製造販売と紡績・製糸の織維業が各々三社である。設立地は主に岡山・倉敷・児島郡の瀬戸内沿岸地帯に偏在している。資本金三三万七五〇〇円の倉敷紡績が規模の点で頭抜けていて、他はすべて資本金四万円未満の小規模なものである。一社の役員延数四九人、香川真一が二社を兼任しているので純数では四八人である。兼任者のいない一四人の商人役員は比率では二九・二%を占め、県外者はなく、すべて県内に居住している。22表に掲示するように業種は繰綿呉服木綿の衣料品関係商が四人、紙・書籍・文具商が各々三人であり、他は米穀商、酒造商、塩問屋と廻船問屋である。判明する商人役員の比率が低いので、家業と設立企業の業種との間の相関性を云々出来ないが、反面、岡山市内の

21表 岡山県下設立企業 11社

企業名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株)倉敷紡績	窪屋郡	20.10	33.75	6人
(株)山陽製糸	笠岡	22.3	4.0	6
(株)岡山製糸	岡山	22.12	3.0	6
(株)岡山精米	郡宇郡	21.10	3.5	5
(株)撫川精米	郡宇郡	22.3	1.5	5
(株)倉敷精米	窪屋郡	21.6	1.5	5
(株)藤戸一蘭筵	児島郡	22.4	1.0	5
(株)錦筵	児島郡	22.4	1.0	3
(株)益友一貸金	赤坂郡	20.10	1.22	6
(株)西大寺精米	上道郡	21.6	1.4	—
(資)綾筵	郡宇郡	20.12	2.0	2

第四六巻 第一号

22表 岡山県商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
大原孝四郎	呉服問屋	(株)倉敷紡績
小松原慶太郎	書籍商	(株)倉敷紡績
大橋良平	繰綿問屋	(株)倉敷紡績
浅野富平	木綿商	(株)山陽製糸
光藤亀吉	紙商	(株)岡山製糸
仁科具治郎	文具商	(株)岡山製糸
浜大坊益三郎	塩問屋	(株)岡山製糸
塚本芳五郎	米穀問屋	(株)岡山製糸
原正賢	清酒醸造	(株)岡山精米
川原宇平	米穀商	(株)倉敷精米
北田久右衛門	廻船問屋	(株)倉敷精米
佐藤栄八	小倉帶地卸商	(資)綾筵

註 営業種の出典：『商工人名録』・『人事興信録』・『簡作人名大辞典』・『小田郡誌』・『本邦綿絲紡績史』・『藤戸町誌』・『岡山県商工会議所八十年史』・『倉敷市史』・『岡山県大百科辞典』・『倉敷紡績百年史』等。

五八 (一一八)

有力呉服太物商の動きがほとんどみられないことに気付かされる。業種として最も多い四社が設立された精米会社のうち岡山精米は、香川真一・塚本芳五郎・石原志簾・三村久吾等の発起によって設立されたものであり、三層からなる煉瓦石製の機械館一棟を建築し、英人技師アダムスを招聘して技術修練のため十数人の男子工を雇用している。そ

の経営的成功は会社事業への信頼感を高め、明治二八年の岡山商業会議所の石炭使用調査によると、精米業は岡山紡績・岡山電燈に次いで第三位となっている。⁽⁶¹⁾ 三社設立された花蘭筵の特産的名声は、明治一一年という早い時期に特許をとった磯崎眠亀による「錦莞筵」の発明、明治一九年の藤原文七の「綾織」の成功等により確立されたが、特に明治一七、八年頃から急増した欧米への輸出が発展を促した。⁽⁶²⁾

同じく三社設立された織維企業のうち、岡山県の近代産業を代表するものとなった倉敷紡績の設立状況を見ておこう。倉敷紡績設立のそもそもの呼掛け人は吾籍商の小松原慶太郎である。明治一九年一二月、二四歳の小松原は倉敷村における県知事以下多数の有力者の出席した官民大懇親会の席上、当時日本有数の綿花産出地であった倉敷に紡績会社設立の必要性を説く熱弁をふるい、翌二〇年一二月にいずれも倉敷村居住の発起人十一名の名前を連ねて創立願いを県知事宛に出している。

倉敷紡績発起人

氏名 営業・役職

木村光太郎 倉敷村前戸長

井上清太郎 洋小間物陶器商

安田枏造 陶器塗物商

児島常造 製茶商（*明治二五年の「商工人名録」は児原常三として載っている）

大橋良平 繰綿問屋

小河原文平

木山精一 県会議員

木村利太郎 醤油醸造商

林 醇平 県会議員

小松原慶太郎 書籍商

大橋澤三郎 繰綿問屋

（出典：細川太一『本邦繰綿紡績史』第五卷、營業・役職は「倉敷紡績百年史」・「商工人名録」明治二五年版による）

七人の商人を含む一八の発起人のなかから、四名の取締役には木山精一、林醇平、小松原慶太郎、大橋澤三郎が就任し、二八年当時の六人の役員も、病没した大橋澤三郎に代わって発起人の大橋良平（澤三郎の義兄弟）が就いている変化があるくらいで、発起人の役員四人は変わりない。初代の同社頭取の大原孝四郎は、これら青年集団によって設立された倉敷紡績の対外的信用付加のため加盟を懇望され、第一回株主総会において頭取に選出されたのである。⁽¹⁰⁾

大原孝四郎は天保四年に岡山の旧家藤田家に出生し、安政五年大原家の養嗣子となった。⁽¹¹⁾ 大原家は代々近江屋与兵衛を襲名する商家で、幕末期には蔵米取引・繰綿や実綿取引・呉服等の倉敷に集散する商品を取り扱う問屋業に従事しつつ、貸金業によって耕地を集積し明治一〇年には一〇四町歩を所有し、一七年二四七町歩、二〇年三〇四歩を所有して松方デフレ期を通じて県下屈指の大地主に成長していた。⁽¹²⁾ 孝四郎は倉敷紡績設立によって株式投資を開始し、二四年に設立された倉敷紡績の機関銀行ともいべき倉敷銀行の頭取を兼務し、直接経営に従事した両社への投資をきっかけにして投資活動を拡大していくのである。⁽¹³⁾

五〇町歩以上地主の密度・比重が全国平均に近く、西日本諸県のうちでは五〇町歩以上地主の密度・比重の比較的高い県といわれる当県の地主の投資活動をみるために「大地主表」に載っている地主役員を探すと、地価額一万一〇〇〇円～二万六〇〇〇円の小田郡の三人が山陽製糸の役員となっているくらいであり、この期の地主の投資活動は活

23表 愛媛県下設立企業 12社

企業名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株)大洲銀行	大洲	22. 7	7,924 <small>万円</small>	7 ^人
(株)八幡浜銀行	八幡浜	21.10	10.0	8
(株)郡中銀行	郡中	19. 6	10.0	8
(株)浦和銀行	南宇和郡	22. 1	1.5	2
(株)宇和紡績	西宇和郡	22.12	12.0	7
(株)伊予木綿	今治	22.12	5.0	5
(株)宇和島反物	宇和島	22. 4	1.0	6
(株)南予製糸	宇和島	22.10	3.0	8
(株)伊予汽船	郡中	21. 6	8.5	3
(株)灘汽船	喜多郡	20. 8	0.7	6
(株)伊予鐵道	松山	19.12	19.0	11
(株)宇和島桑園	宇和島	22.12	0.6885	5

発ではない。

十一 愛媛県下の動向

23表に示した一一社のうち、八社は宇和島・八幡浜・大洲等の県西部に設立されている。業種は銀行四社、紡績・製糸・織物の繊維関係四社、鉄道・汽船の運輸業三社が主な設立業種である。役員延数七六人、重複役員は一人で純役員数七四人、そのうち全員が県内居住者である商人役員は延数で三一人であり、二社の役員を兼務している者は二人であるから商人役員の純数は二九人、三九・二%を占めている。

24表でみると、営業種の内訳は、酒・醤油・酢の醸造業者九人が突出しており、次いで呉服太物・糸商の八人、製蠟商四人の順である。

なかでも舶来物の糸・反物・小間物を扱う商人が六人入っているのが目立っている。複数の企業の役員を兼務する者は、清酒醸造商の宮内治三郎と薬種売薬具商の村瀬宗蔵であり、ともに伊予郡郡中町に住み、郡中銀行・伊予汽船の役員である。

このうち多少とも経歴を知ることの出来る宮内治三郎は次のような経歴の持主である。宮内は安政四年伊予郡郡中の酒造家に生まれ、宮内惣衛(郡中町長老)・篠崎謙九郎(米穀商請負業)・宮内直吉(初

24表 愛媛県商人役員一覧

氏名	営業種	役員参加企業
村上長次郎	製蠟卸商	(株)大洲銀行
岩村順作	製蠟卸商	(株)大洲銀行
河野貞太郎	製蠟卸商	(株)大洲銀行
菊池清治	和洋紡績商	(株)八幡浜銀行
菊池五平	和洋紡績商	(株)八幡浜銀行
高橋長平	呉服和洋反物商	(株)八幡浜銀行・(株)八幡浜醤油
西村弥太郎	糸類洋反物商・塩商	(株)八幡浜銀行
高橋伝吾	書籍商	(株)八幡浜銀行
菊池守太郎	醤油醸造業	(株)八幡浜銀行・(株)八幡浜醤油
宮内治三郎	清酒醸造	(株)郡中銀行・(株)伊予汽船
宮内六郎右衛門	清酒醸造	(株)郡中銀行
藤谷豊城	醤油醸造商	(株)郡中銀行
村瀬宗蔵	薬種絵具商	(株)郡中銀行・(株)伊予汽船
武智良太郎	酒類醸造商	(株)郡中銀行
宮内本三郎	搾油・茶商	(株)郡中銀行
上田京平	酢醤油醸造	(株)宇和紡績
菊池清平	運送業	(株)宇和紡績
二宮精四郎	酒類醸造商	(株)宇和紡績
兵頭吉歳	木蠟製造商	(株)宇和紡績
柳瀬春次郎	織物商	(株)伊予水綿
三原森太郎	紡績砂糖商	(株)宇和嶋反物
兵頭寅一郎	呉服製蠟商	(株)宇和島反物
松広源太郎	呉服和洋反物商	(株)南予製糸
篠崎謙九郎	米穀商兼請負業	(株)伊予汽船
鈴木安職	時計商	(株)伊予鉄道
八束喜蔵	舶来小間物商	(株)伊予鉄道
二宮佐平	醤油醸造	(株)伊予鉄道
藤岡勘左衛門	清酒醸造	(株)伊予鉄道
神森真	回漕業・肥料商	(株)南予製糸

注：営業の出典：『商工人名録』・『愛媛県史』・『西予人物志』・『愛媛近代史料』・『愛媛県人物名鑑』

代郡中町長）・藤谷豊城（醤油醸造商）等と郡中銀行を創立し、その後も南予鉄道会社や伊予汽船を設立開業した。その他二二一年には県会議員となり、二七年には自由党公認で衆議院議員に当選している。宮内は八幡浜と郡中という地方経済の指導者的立場にあったことを知りうるの

である。

次にこの時期の中心的な投資分野である鉄道・銀行・紡績の役員に名を連ねている商人を見てみよう。松山―三津浜間の軽便伊予鉄道の発起設立に、旧松山藩士小林信近・山内清平等と尽力した松山の商人には、舶来小間物商の八束喜蔵、清酒醸造商の藤岡勘左衛門・仲田槌三郎、時計商の鈴木安職(註三)が在る。大洲銀行の開業当時の七人の役員のうち三人は製蠟商である。しかも頭取に村上長次郎が就き、取締役兼支配人は岩村順作、河野真太郎は取締役であるから、大洲銀行は愛媛の在来産業の一つである製蠟商を中心に設立された銀行といえる。最初二千鍾の小工場として出発し、後に一万鍾余の紡績会社に成長する宇和紡績の最初の重役陣は次のような人々である。

宇和紡績創業時の役員

役職	氏名	営業・役職
社長	兵頭吉蔵	木蠟製造商
常務取締役	兵頭昌隆	吉蔵の養子
取締役	上田京平	酢醬油醸造商
取締役	宇都宮壮十郎	船舶業・製蠟業・海産物売買・鉱山業
取締役	辻吉敬	――
取締役	矢野小十郎	製蠟業・酒造業
取締役	鎌田傳治	――
取締役	清水範蔵	――

(出典：絹川太一『本邦綿絲紡績史』第五卷五三頁)

社長の兵頭吉蔵は、天保七年生まれで、伯父の家に第五代当主として入った。兵頭家は土地の資産家であり、製蠟業と同時に海運業も手掛け、三〇歳の頃には土佐幡多郡の新田開発に従事したといわれ、川之石郵便局長を勤め、また第二十九国立銀行の創立当初の取締役支配人であり、明治一九年には頭取になっている。^(四)常務取締役の昌隆は、嘉永五年宇和島藩士竹村佐平の長男に生まれ、実家没落のため吉蔵の養子となり、明治一九年頃、川之石出身で大阪の実業家矢野貞興の勸奨を承けて宇和紡績の創立を立案した、計画の実質的な推進者である。政治の方面でも川之石村長、県会議員、衆議院議員として活動した。^(五)取締役の宇都宮壮十郎は川之石の出身で、船舶・製蠟業や海産物を扱っていたが、明治一〇年第二十九国立銀行の創立に奔走して取締役となり、さらに兵庫県第六十二国立銀行に入社して副頭取となった。^(六)同じく取締役の矢野小十郎は安政五年出生の川之石の製蠟業者であり、明治八年兵頭吉蔵等と銀行類似会社潤業会社を起こし、十一年第二十九国立銀行の設立に参加して取締役となっている。^(七)宇和紡績は人材・資金とも地元資本によって設立された企業である。

営業種と役員就任業種との関係を見ると、直接の関連はみられないが、醸造業・呉服太物・薬種といった在産商品を抱ってきた商人による家業外共同企業への出資が当地方でも見られ始めたことを確認できよう。特に商人役員が三九・二％に達していることからみても、この時期の愛媛県の経済活動は全国水準を上回っているといえる。

なお「大地主表」の地主役員は、郡中銀行と伊予汽船の役員を兼務する宮内治三郎と南予製糸の玉井安蔵の二人のみである。

十二 福岡県下の動向

25表によって設立された一七社のうち、一二社は筑後の農村部と久留米・柳川・大牟田等の町部であり、四社は門

25表 福岡県下設立企業 17社

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株) 三池銀行	三池郡	19.10	2.0 ^{万円}	8 ^人
(株) 田主丸銀行	田主丸	21. 5	9.0	8
(株) 永福銀行	上妻郡	19.12	1.8	9
(株) 草野銀行	山本郡	22. 9	5.0	4
(株) 香春銀行	田川郡	22.11	1.5	5
(資) 羽犬塚銀行	上妻郡	22. 1	0.93	3
(株) 九州鉄道	門司	21. 6	1100.0	13
(株) 筑豊鉄道	若松	22. 7	370.0	10
(株) 久留米紡績	久留米	22. 4	30.0	8
(株) 三池紡績	大牟田	22. 5	60.0	8
(株) 門司築港	門司	22. 3	25.0	5
(株) 専転時計	柳川	19.10	0.534	5
(資) 三池土木	大牟田	21. 1	1.0	1
(資) 船小屋鉦泉	下妻郡	21. 4	0.625	1
(名) 明哲貸金	御原郡	19. 3	—	3
(名) 下川北嶋共進	上妻郡	21. 5	—	3
(株) 共文社	福岡	21. —	1.146	7

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向（末永國紀）

司・若松・田川の県東部に立地していることがわかる。福岡市は一社のみである。業種は銀行関係七社、繊維部門と運輸部門の各三社が主なものである。規模は資本金一〇〇万円の九州鉄道・三七〇万円の筑豊鉄道・六〇万円の三池紡績・三〇万円の久留米紡績・二五万円の門司築港が際だっており、この大手五社に対して、他方には資本金二万円以下の零細企業は八社にのぼる。大手五社のうち、福岡・佐賀・熊本の三県知事の率先により発起され、役員一三人のうち八人が東京、大阪、佐賀、長崎・熊本の県外者である九州鉄道をはじめ、筑豊鉄道は十人のうち一人、三池紡績は八人のうち一人、門司築港は五人のうちの二人が県外者役員である。役員延数一〇一人、うち重複役員は清水可正（旧小倉藩士）・斎藤美知彦（旧小倉藩士）・熊谷直候（旧小倉藩士）・小野隆基（旧柳川藩士）・高瀬九三治（庄屋）の五人であるから、役員純数は九六人。兼任者のいない商人役員は純数で二二人、役員比率は二二・九%である。26表が示すように商人役員のうち県外者は、九州鉄道の今村清之助・

26表 福岡県商人役員一覽

氏名	営業種	役員參加企業
井上取藏	酒造商業	(株) 三池銀行
森田益藏	商業	(株) 田主丸銀行
行徳幸平	米穀肥料商業	(株) 田主丸銀行
牛島広吉	米穀商業	(株) 永福銀行
高橋熊次郎	紙商業	(株) 永福銀行
高橋益造	肥料商業	(株) 永福銀行
高橋儀平	米穀卸商業	(株) 永福銀行
高橋栄次郎	荒物商業	(株) 永福銀行
浦野市太郎	醬油醸造商業	(株) 香春銀行
今村清之助	両替商業	(株) 九州鉄道 (東京、日本橋)
井上保次郎	両替商業	(株) 九州鉄道 (大阪、東区、北浜)
松田源五郎	倉庫貸付業	(株) 九州鉄道 (長崎市酒屋町)
田中市兵衛	肥物商業	(株) 九州鉄道 (大阪、西区、靉)
小林作五郎	酒造商業	(株) 筑豊鉄道
堤 猶久	酒造商業	(株) 筑豊鉄道
安川敬一郎	炭鉱業兼石炭商業	(株) 筑豊鉄道
秋山松次郎	久留米紡織商業	(株) 久留米紡績
星野利七	乾物商業	(株) 久留米紡績
木村庄平	久留米紡織商業	(株) 久留米紡績
飯田甚吉	呉服太物商業	(株) 久留米紡績
豊永長吉	米商會所頭取	(株) 門司築港 (山口県赤間関)
下川 樹	織物販売業	(名) 下川北嶋共進

第四六卷 第一号

註. 営業種の出典: 『商工人名録』・『福岡県官民肖像写真』・『財界物故傑物伝』・『香春町誌』

()は県外居住所.

井上保次郎・松田源五郎・田中市兵衛と門司築港の豊永長吉の五人である。

県内の大手五社の役員構成の特徴を見てみよう。先述のように九州鉄道には県外資本の流入と同時に、役員に県内の四人の士族が参加していることが目立っている。すなわち旧小倉藩士の清水可正・斎藤美知彦、旧久留米藩士の鹿野淳二、福岡藩士の小河久四郎である。三池紡績は三池炭鉱の三井への払い下げにもなって地元産業の振興を目的として、三井の益田孝の推奨により三井と旧柳河藩士族と三池・山門兩郡の農商等の合同出資で設立された。(註) 一株五〇円資本金三〇万円、一〇三六八錘の

三池紡績は、社長こそ柳河藩出身の徳望家大村努であったが、初期経営の実権は三池郡農商出身の野田卯太郎と永江純一にあった。⁽¹⁰⁾ 発起人のうち明治二八年に役員を勤めているのは旧柳河藩士の大村努・竹原苞・小野隆基・吉田孫一郎・森時三郎、三池の農商を代表する永江純一・野田卯太郎それに三井の益田孝である。嘉永六年に生れた野田の生家は豆腐・荒物・砂糖を販売するささやかな商家であり、永江も同年の生まれである。⁽¹¹⁾ 二人は一九九年三池銀行、二〇年三池土木を設立し、また自由民権運動、県会議員をへて代議士となつて政界で活躍する、実業家を兼ねた政治家であつた。県外資本と地元資本の共同出資によつて設立された点では筑豊炭の運送を目的に敷設された筑豊鉄道（創立時は筑豊興業鉄道会社といひ、明治二六年改称）も同様である。⁽¹²⁾ 設立時の重役は、社長の堀田正養と幹事安達何四郎の二人は東京であるが、常議員（後の取締役）九人と検査役二人は県会議員を中心とする福岡県人であり、地域持株比率も東京・大阪・兵庫・京都・愛知で三二%、他は福岡市・遠賀郡・鞍手郡・嘉麻郡・穂波郡を中心とする福岡県内である。二八年の一〇人の役員には酒造商の小林作五郎・堤猶久と石炭鉱業主兼石炭商の安川敬一郎が名を連ねている。一方、地元資本によつて設立された久留米紡績の八人の役員は、久留米緋緞商の秋山松次郎・木村庄平、呉服太物商の星野利七・飯田甚吉といった地元久留米の商人と、林田正次郎・榊直矢・佐々真成・国友勝興の旧久留米藩士が四人づつ分けあつている。門司築港の五人の役員のうち、清水可正・斎藤美知彦・熊谷直候の三人は旧小倉藩士である。

なお「大地主表」に載っている地主役員は九人を数えるが、行徳幸平・小林作五郎・堤猶久は酒造業、麻生太古は著名な石炭鉱業主であるから純粹の地主ではない。当県の企業設立と役員構成には、県内の旧藩士族と県内の酒造商・衣料商などの商人資本の結合によるものと、この二者に県議クラスの地方政治家の介在による中央からの大資本の動員に特徴がある。なかでも旧藩士は、役員数も十八人を数えて商人役員に次ぐ位置にあり、五人の重複役員のうち

四人を占める等、目立つた存在になつてゐる。例えば、門司築港・香春銀行の熊谷直候と筑豊鉄道・香春銀行の高瀬九三治を取り上げてみよう。この二人はともに各々の企業の創設当時から役員であり、旧小倉藩時代には熊谷は山奉行、高瀬は村役人としての勤務の上でも緊密な關係にあり、維新後も熊谷は田川郡長、高瀬は田川郡添田町長として地域の指導者的立場にあつた。^(註) こうした藩政時代以來の人的つながりを基盤にして旧藩士族による企業設立が遂行されている点に福岡県の一つの特色がみられる。一方、近世以來の博多商人の動きとしては、わずかに筑豊鉄道の初代常議員に和洋小間物・文房具の卸商、下沢善四郎の名前を見いだすことができるのみであり、旧藩士の場合と好対象を示している。^(註)

十三 北海道の動向

27表の一五社のうち、農水産鉱物等の地元産出品関連の業種が九社、運輸部門は四社、その他は銀行と商社である。地元産出品関連業種というのは、水産業、開墾、製糖業、製麻業、麦酒、馬匹であり、すべて北海道の開発と関連していることを知ることができる。立地ははまだ札幌以南の道南部に集中している。役員延数八五人、重複役員九人、役員純数七六人のうち、商人役員は延数で四三人、重複役員六人を除くと商人役員は三七人、その比率は四八・七%である。北海銀行、北海道炭鉱鉄道、日本昆布、帝国水産、札幌製糖、北海道製麻、札幌麦酒という大資本を擁する企業の役員ほとんどは、道外の東京・大阪・京都・名古屋等の大都市の役員によつて占められている。28表によれば商人役員三七人のうち、一八人は東京をはじめ道外居住者である。一社の役員を兼任している八人のうち、田中平八・林兼一郎・加東徳三・藤平重資の四人の商人役員はいずれも東京居住であり、北海道の開拓における中央資本の比重の大きさを現している。

27表 北海道の設立企業 15社

企 業 名	設立地	設立年月	資本金	役員数
(株) 北 海 銀 行	札 幌	22. 7 ^年	7.5 ^{万円}	5 ^人
(株) 北海道炭鉄鉄道	札 幌	22.11	650.0	11
(株) 日 本 昆 布	函 館	22. 6	100.0	6
(株) 帝 国 水 産	函 館	21.10	25.0	5
(株) 興 産一藍・開墾一	札 幌	21. 9	5.0	5
(株) 北 海 道 釧 山	小 樽	21.10	50.0	4
(株) 岩 内 汽 船	岩 内 郡	22. 6	5.0	5
(株) 函 館 汽 船	函 館	19. 2	10.0	6
(株) 天塩北見漕運	小 樽	22. 7	3.8	3
(株) 紋 釧 製 糖	有 珠 郡	20. 5	5.5	5
(株) 札 幌 製 糖	札 幌	21. 4	49.9995	8
(株) 北海道共同一商社一	函 館	22.—	10.0	5
(株) 北 海 道 製 麻	札 幌	20. 5	80.0	8
(株) 札 幌 麦 酒	札 幌	20.12	13.0	6
(株) 日高馬市一馬匹売買一	静 内 郡	21. 8	0.069	3

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向(末永國紀)

道内の商人では水産物・荒物・荷受問屋・運送業等を営業する十九人が、興産一藍・開墾一、岩内汽船、函館汽船、天塩北見漕運、北海道共同一商社一といった主として家業関連企業の役員に就いている。この一九人のうち、函館の忠谷久蔵・田中正右衛門・平田文右衛門・渡辺熊四郎・杉浦嘉七の五人は「三府五港」に三万円以上の豪商資産家として名を連ねている。これらの道内商人を代表するのが函館の杉浦嘉七と札幌の谷七太郎である。杉浦は福島屋の屋号をもつ場所請負人であり、幕府の函館会所の用達元メであったが、維新後も明治一二年開業の函館第百十三銀行初代頭取や函館商法会議所会頭を務めている。⁽¹⁵⁾製藍・開墾を業とする興産社と札幌製糖の役員を兼ねる谷は、商工会議所の前身として明治二四年九月札幌の商業人有志によって結成された商業倶楽府の府長となつている。⁽¹⁶⁾

蝦夷を北海道と改め、一一カ国八六郡に分け、開拓使が設置されると、移住民が多数渡航するようになったが、函館港は新開港場であるだけに商機に恵まれていた。同港の商業発達の波に乗って成功した移住商人の一人渡辺熊四郎の経歴を

28表 北海道商人役員一覽

氏名	營業種	役員參加企業
藤平重資	廻米問屋	(株)北海銀行・(株)札幌製糖(東京、深川)
吹原九郎三郎	白木綿卸商	(株)北海銀行(名古屋、和泉)
高島嘉右衛門	材木商・請負業	(株)北海道炭鉄鉄道(東京、芝)
田中平八	生糸売込商	(株)北海道炭鉄鉄道・(株)北海道釧山 (東京、京橋)
雨宮敬次郎	生糸類売込商	(株)北海道炭鉄鉄道(東京、築地)
加東徳三	株式取引所仲買	(株)日本昆布・(株)札幌製糖(東京、京橋)
矢島平造	株式仲買	(株)日本昆布(東京、日本橋)
林策一郎	雜貨商・革具商	(株)帝国水産・(株)紋造製糖 (株)札幌製糖(東京、銀座)
西川貞二郎	肥料商	(株)帝国水産(滋賀県、蕨生郡)
谷七太郎	商業	(株)興産・(株)札幌製糖
後藤半七	米穀荒物国産物商	(株)興産
久住平次郎	藍・肥料商	(株)興産(徳島市)
橋本清吉	荒物商・廻船問屋	(株)岩内汽船
安田半兵衛	水産商	(株)岩内汽船
大嶋順兵衛	荒物・水産商・ 廻船問屋	(株)岩内汽船
梅沢市太郎	水産・呉服太物商	(株)岩内汽船
広谷源治	委託売買・倉庫業	(株)函館汽船
高橋文之助	味噌醤油醸造商	(株)函館汽船
忠谷久蔵	物産・荒物商	(株)函館汽船
能登善吉	回漕業	(株)函館汽船
筑前善次郎	委託物品問屋	(株)函館汽船
遠藤又兵衛	海産物商	(株)天塩北見漕運
山口梅太郎	廻船問屋	(株)天塩北見漕運
麻里英三	魚油製造・運送業	(株)天塩北見漕運
岡部広	紙問屋	(株)札幌製糖(東京、京橋)
加藤彦吉	元結製造卸商	(株)札幌製糖(名古屋、堀詰)
杉浦嘉七	場所請負業	(株)北海道共同一商社一
田中正右衛門	荷受問屋	(株)北海道共同一商社一
平田文右衛門	和洋金物商	(株)北海道共同一商社一
渡辺熊四郎	洋物・時計・船具商	(株)北海道共同一商社一
洪沢惣作	米商	(株)北海道製麻(東京、芝)
本野小平	清酒醸造商	(株)北海道製麻(仙台市北六番)
山中利右衛門	閃東呉服卸商	(株)北海道製麻(滋賀県、神崎郡)

大倉	八郎	賀	易	商	(株)	札幌	麦酒	(東京、赤坂)
浅野	総一郎	石	炭	商	(株)	札幌	麦酒	(東京、深川)
鈴木	恒吉	洋	酒	商	(株)	札幌	麦酒	(東京、日本橋)
本庄	康平	穀類	呉服	荒物商	(株)	日高	馬市	

註. 営業種の出典：『商工人名録』・『新北海道史』・『新札幌市史』・『函館市史』

()は道外居住所。

あげておこう。⁽¹⁷⁾ 渡辺は、天保十一年豊後国直入郡竹田に生まれた。本性は山下、牛家は商家であった。一七歳の時、長崎に出て親戚渡辺家の養子となり、同地の商家の奉公人となり外国貿易の経験を積んだが、元治元年大商人を目指して新開港場函館に至り、西洋小間物店を開いた。これは資本少額のためめもなく廃業し、西洋型帆船に乗り込み東西各港に往來していたが、戊辰戦争終結後、二五両の資本で再度函館に西洋小間物店を開き、以後は営業も伸長し、書籍業・函館新聞・船具店を創始し、また時計店・砂糖店・倉庫業・回漕業を開業した。明治一四年には金物商平田文右衛門、洋物商今井市右衛門等と海軍省所管の蒸気機械類の払い下げを受け函館機械製造所を開業している。まさに新天地で成功した移住商人の一典型である。

小括

明治一九年から二二年のいわゆる企業勃興期の商人資本の全国的投資動向を考察する場合、当該期間に設立された企業の役員名の全国的に判明する資料は得られない。そこで次善の方法として、この期間に設立され、二三年の最初の経済恐慌をくぐり抜けた企業の役員の内、二八年と二九年の『役員録』に載っている役員名のなかの商人、ないし商人出身者を知るために、一五年版・三一年版の「人名録」を基にして、府県史・郡誌・市町村史などの地方史、社史の類も参照しながら商人名を探索してきた。その過程で紡績、鉄道、電気、石油等の移植企業の創立状況も検討をおこなってきた。また、商人役員の度合を対照化するために、「大地主表」にもとづいて地主役員の活動状況も照合してきた。むろん出版物の博搜の程度、当該案件に関する資料の存否、

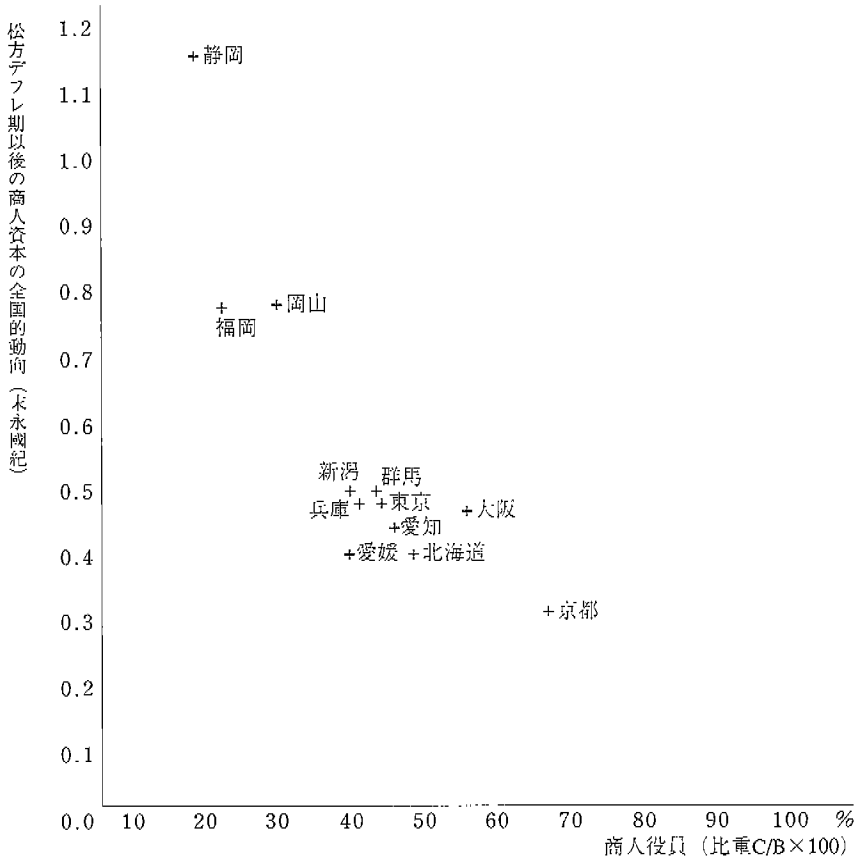
29表 商人役員の比重と密度

府県別	設立社数A	純役員数B	純商人役員数C	商人役員比重 (C/B×100)	商人役員密度 (A/C)
東京	49	237	102	43.0 ^{%)}	0.18
京都	16	75	50	66.7	0.32
大阪	67	247	143	57.9	0.47
兵庫	51	256	106	41.4	0.18
新潟	9	45	18	40.0	0.50
群馬	10	47	20	42.6	0.50
愛知	16	81	36	44.4	0.14
静岡	20	100	17	17.0	1.18
岡山	11	48	14	29.2	0.79
愛媛	12	74	29	39.2	0.41
福岡	17	96	22	22.9	0.77
北海道	15	76	37	48.7	0.41

記述の精粗等の不備はこうした調査では避けがたい。したがってもとより完全を期し難いとはいえ、商人資本の全国的動向の大筋を、一二道府県の趨勢として素描しておこう。

29表は以上の一二道府県の商人資本の密度と比重を示したものであり、1 図はそれを図示したものである。1 図には明治二八年当時、一九年から二二年という我々の設定期間に設立された各府県の企業について、縦軸には幾社につき一人の商人役員が参加しているかを算出して各府県の商人役員の密度を示している。当然数値の小さいほど密度は濃いことになる。横軸には各府県の役員純総数に占める商人役員純数の割合を%で算出して、商人役員の比重を示している。商人役員の密度は京都の〇・三三社から静岡の約一・一八社まで、商人役員比重は京都の六六・七%から静岡の一七・〇%までの格差がある。1 図に示した通り、各府県は右肩下がりの曲線上に位置するが、密度において〇・七以上であり比重三〇%未満の一群と密度〇・五社以下、比重において四〇%以上である一群に二分される。密度薄く比重軽い福岡・岡山・静岡のグループ、それと対称的位置にある京都・大阪・東京・北海道・愛媛・群馬・兵庫・新潟・愛知のグループである。静岡・岡山・福岡からなる前者グループの場合、

商人役員（密度A/C）



1 図 商人役員 の 比重 と 密度

いずれも県庁所在地となつた地下町商人の動きが鈍いことが共通点である。同性格の他の都市と比較すれば、これらの諸都市の老舗商人の新しい企業機会への関心の薄さが、県全体の水準を低める結果をもたらしたといえる。一方、商人役員の存在の大きい後者のグループでは、呉服太物・米穀肥料・清酒醤油醸造といった伝統的商品を扱ってきた老舗が、家業関連部門のみに限定することなく異業種部

門の役員にも名を連ね、なおかつしばしば企業創立のメンバーである場合が確認された。また兵庫・福岡・北海道の事例にみられたように、域外資本の導入によって大資本を要する企業が、企業立地として有利な地方に設立されていることは、投資が合理性を求めて全国的視野のもとで行われつつあった証左であろう。

企業勃興のさなか、明治二年四月の「時事新報」は二六日と翌二七日の二日間にわたって、イギリス在住の高橋達(明治一五年の「日本紳士録」には日本郵船横浜支店員として載っている)の「日本の工商業家に告ぐ」というかなり長大な論説を載せている。この論説のなかで高橋は当時の日本の企業熱を次のように指摘している。

……(前略)……然々我国近來の世潮を推測するに、其現象の最も偉大に志て我々在外の客を驚かす者は合本工商会社設立の企て是なり、聞く所に據るに昨二十年間の募集資本合計一億二千万円なりと(縦令へ名のみなるにもせよ)、日本の如き貧小国にて、殊に七八年來の不景氣、民間の疾苦未だ癒いえざるの今日に、斯る大金を突然工商業に吸収する事ともならば、国の經濟は果して如何に成往く可きや掛念に堪へず……(後略)……

すなわち高橋は、当時の日本の内外の耳目をそばだたせてる事柄は合本組織の工商会社設立発起の激しい動きであると指摘し、昨二〇年の募集資本は名目だけでもせよ合計一億二〇〇万円にもほり、長期間の不景氣の後、日本のような貧小国がいきなりこのような大金を上商に投入することに懸念を表明しているのである。さらに高橋は「近時諸工業器械等買入れの爲め英國に來遊する日本の人士」、いうところの上商業家に対して、企業設立の際考慮すべき次のような項目を挙げ、それぞれについて検討を加えている。それは、第一起業の熱、第二愚凶作の考え、第三担任者の技倆、第四將來事業の見込み、第五外商の競争、第六仔産物の關係、第七東西資本流通の相違、第八共同連合

30表 繊維業関係者の渡欧

期間 (明治)	氏名	目的	備考 (出典)
19年	湖 亀 治 郎 七	商況視察	第5版『人事興信録』
19年	佐 羽 喜 六	鉄製ジャガード 機紋彫機械購入	『桐生織物人物伝』
20年4月～11月	小林吟右衛門	織機買付	『変革期の商人資本』
20年6月～	大 井 信 吉	紡績機械購入	『鐘紡百年史』
	奥 田 小 三 郎		
20年7月～21年	岡 田 令 高	紡績機械購入	『本邦綿絲紡績史』
	服 部 俊 一	紡績実地訓練	
20年8月～21年	浜 岡 光 哲	商工業視察	『京都織物株式会社五十年史』
	近 藤 徳 太 郎	機械購入	
	稲 畑 勝 太 郎	建築製図取調	
	高 松 長 四 郎		
21年	阿 部 孝 助	製絨機械買付	『日本現今人名辞典』
21年	佐 羽 吉 右 衛 門	商況視察	『桐生織物人物伝』

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向 (末永四紀)

の要用からなる八項目である。

この高橋の論説から我々は、当時の興業熱と、工業機械類の直接買付けにイギリスへ出向いた日本人が日常的に見られたことを窺うことができるのであり、この時期渡欧した人々の群れの中には商家の当主の姿も見られたのである。例えば、繊維品製造に関係ある人々に限っても30表のように、一三人が渡欧したことが判っている。湖亀治郎七は嘉永六年六月八日大阪府平民湖亀治郎兵衛の長男に生まれ、明治七年家督相続し、貿易商とフランネル商を営み、フランネル製造の嚆矢と目され、この商況視察から帰国後私立湖亀銀行を創立し、日本紡績、通商銀行、伊予鉄道等数社の重役を兼任している。桐生新町の老舗である佐羽家の五代目を嗣いだ佐羽吉左衛門は佐羽喜六と義兄弟であり、二〇年一月、織物関係の有力者達の発起によって桐生に設立された資本金二五万円の日本織物会社の社長と常務として経営の衝にあたるようになる。著名な近江商人の一人である小林吟右衛門は資本金一〇万円の小名木川綿布会社の発起人の一人であり、大井信吉と奥田小三郎は前述のように鐘紡の発起人である。岡田令高・服部俊一は名古屋の有力な和洋綿糸卸商近藤友右衛門の勧誘により、二〇年

六月愛知県熱田に設立された資本金五〇万円の尾張紡績に入社した技師である。二〇年五月資本金五〇万円をもって設立許可された京都織物会社の発起人浜岡光哲は、商工業視察を兼ねて同社の機械購入と建築製図の取調のため近藤・稲畑・高松の三人の技師を帯同して欧米へ渡り、翌年七月から一二月にかけて順次帰国した。阿部孝助は先述のように著名の呉服太物商であり、二〇年川崎八右衛門・宮部久・柿沼谷蔵等と東京王子に資本金三五万円の東京毛糸糸紡績会社を設立した直後の渡欧である。

このように渡欧に象徴される一連の商人資本の動きの中に、松方デフレ政策が、維新後の動向に当惑していた商人達にとつて、従来の家業を確保しつつ新分野へ打って出る契機となったことを指摘できるのである。⁽¹²⁾

註

- (1) 例えば東京府の場合、二八年版では当該期間の設立は三五社であるが、二九年版によって修正すると四九社となる。なお「日本全国諸会社役員録」の明治期の分は、中井常彦・浅野俊光編として柏書房から一九八八年に復刻され、後述する明治三一年版「日本全国商上人名録」と明治二〇年の「日本三府五港豪商資産家一覽」は、渋谷隆一編「明治期日本全国資産家地主資料集成」全五巻として柏書房から昭和五九年に復刻収録されている。
- (2) 二九年版による補正済み。
- (3) 実業の世界社編「財界物故傑物伝」上巻(実業の世界社、昭和十一年)、二二四―二二七頁。
- (4) 以上、瀬川光行「商界英傑伝」(富山房書店、明治二六年)、九ノ五一―六〇頁。
- (5) 広田三郎編纂「実業人傑伝」第二巻一ノ四〇頁。
- (6) 前掲「商界英傑伝」、八ノ二五頁。
- (7) 山口和雄編著「日本産業金融史研究」織物金融篇(東京大学出版会、一九七四年)、五、九頁。
- (8) 前掲「商界英傑伝」八ノ二六―二七頁。
- (9) 田中重文編纂「日本現今人名辞典」(日本現今人名辞典発行所、明治三三年)、つノ七頁。同書は、日本図書センターから一九八八年に「明治人名辞典Ⅱ」上・下巻として復版された。

- (10) 同書、あノ一二三頁。
- (11) 渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成』Ⅳ（柏書房、昭和五九年）、九五頁。
- (12) 山口和雄、前掲書、五九頁。
- (13) 出中重策、前掲書、きノ一頁。
- (14) 同書、やノ二三頁。
- (15) 同書、かノ七九頁。
- (16) 同書、ほノ七頁。
- (17) 広田三郎、前掲書、第二卷五ノ一、二、六頁。
- (18) 同書、第三卷、二ノ九、一〇頁。
- (19) 絹川太一、本邦綿絲紡績史、第五卷（日本綿業俱樂部、昭和一六年）七八頁。
- (20) 出中重策、前掲書、はノ四六頁。および『明治商工名鑑』（明治商工史）所収、報知社、明治四三年）四一頁。
- (21) 東京綿商社「第一回半季實際報告」、（『鐘紡百年史』（鐘紡株式会社、昭和六三年）六、七頁、所収）。
- (22) 安岡重明『財閥形成史の研究』（ミネルヴァ書房、昭和四五年）、三七二頁。
- (23) 前掲、『鐘紡百年史』、一七頁、東京綿商社「第一回半季實際報告」。
- (24) 絹川太一、前掲書第四卷、四四九頁。
- (25) 同書、四五四頁。
- (26) 同書、四五四頁。前掲、『鐘紡百年史』一〇〇三頁。
- (27) 山口和雄編著『日本産業金融史研究 紡績金融篇』（東京大学出版会、一九七〇年）四五八―四五九頁。
- (28) 田中重策、前掲書、いノ四一頁。
- (29) 同書、やノ二三頁。『日出新聞』明治二〇年五月二十四日号。
- (30) 同書、えノ五頁。ひノ一六頁。『京都府商工会議所史』（京都府商工經濟会、昭和一九年）、二六一―二九頁。
- (31) 田中重策、前掲書、なノ三三頁。広田三郎、前掲書、第二卷四ノ四〇―四三頁。
- (32) 三浦豊二編輯『田中源太郎翁伝』（昭和九年）。

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向（末水國紀）

- (33) 前掲、『京都商工会議所史』一三五頁。
- (34) 『浜岡光哲翁七十七年史』(浜岡翁表彰会、昭和四年)。
- (35) 山口和雄編著『日本隆興金融史研究』(岩波金庫編、東京大学出版会、一九七四年)三〇七頁。
- (36) 以下の宮業種はとくに断わらない限り、『日本全国商工人名録』(明治三十五年版・三一年版)および田中重策、前掲書による。
- (37) 田中重策、前掲書によれば、堀五郎兵衛は安政五年の生れ、御所出入りの代々の魚商である。
- (38) 西村七三郎についで、『京都府議会歴代議員録』(京都府議会、昭和三六年)一〇頁。
- (39) 田中重策、前掲書、よ、一九九頁。
- (40) 前掲、『京都府議会歴代議員録』一〇三、八頁。
- (41) 上川芳夫『京都府議会議員選挙人名簿』(明治一四年)、『京都学同大学論』(二二卷二号)、前掲、『京都府議会歴代議員録』一七七七頁。
- (42) 高久領之助(明治期地方名望家層の政治行動―河原啓義雄小伝―)(同志社大学人文科学研究所『社会科学』二二(一九七七年))。
- (43) 松本重太郎については以下を参照。坪谷晋四郎『実業家百傑伝』第六編(明治二六年)一五三頁、広田三郎、前掲書、四〇頁、田中重策、前掲書、まの三三頁。松本翁銅像建設会編纂『榎軒松本重太郎翁伝』(大正二一年)、『内外綿株式会社五十年史』(昭和二二年)一〇頁、『明治大正大阪市史』第三巻経済篇中(昭和八年)三六四―三六五頁。絹川太一前掲、『本邦綿絲紡績史』六巻、一八五頁。
- (44) 絹川太一前掲、『本邦綿絲紡績史』四巻、二七一頁。
- (45) 『大阪鉄道略歴』(『明治期鉄道史資料』第二集(3)―I所収)一一頁。
- (46) 絹川太一前掲書、六巻一四六頁。前掲、『大阪鉄道略歴』一〇頁、『宮本又次著作集』第九巻(論談社、昭和五二年)三四頁。
- (47) 『大阪現代人名辞書』(文明社、大正二年)、四四四頁。
- (48) 絹川太一前掲書、四巻、八四―八五頁。前掲、『明治大正大阪市史』第三巻三六四頁。
- (49) 滋賀県能登川町、阿部市郎兵衛家所蔵、『阿部家系図』。
- (50) 田中重策前掲書、たの五五頁、『明治商工名鑑』(前掲、『明治商工史』所収)二二〇頁、『大阪商船株式会社五十年史』(昭和九年)一頁。
- (51) 『阪堺鉄道通史』(『明治期鉄道史資料』第二集(3)―I所収)二頁。絹川太一前掲書、四巻二四七頁。
- 前掲、『財界物故傑物伝』下巻、七頁。

- (52) 宮本又次「船場」(ミネルヴァ書房、昭和十五年) 四二〇―四二二頁。絹川太一「前掲書」六卷二三八―四二二頁。前掲「大阪鉄道略歴」一〇―一二頁。
- (53) 「日本全国商工人名録」(明治三十五年版) 三三八頁、三七三頁。
- (54) 広田三郎、前掲書、三卷、三ノ四四―四七頁。絹川太一「前掲書」六卷一四三頁、一三八頁、二四五頁。前掲「大阪鉄道略歴」一〇―一二頁。広田の「実業人雑伝」では、大阪時計製造業の創立を明治二十七年としているが、明治二十六年刊の第一回「日本全国商会社役員録」に同社はすでに登録されているので、二十七年設立というのは誤りである。
- (55) 前掲「明治大正大阪史」第三卷、三六四頁。伊し芝川・武田の名前は欠落している。
- (56) 瀬川光行、前掲「商界英雄伝」三ノ一―一七頁。
- (57) 山内直一「編輯」(兵庫縣人物列伝)(興信社、明治四三年)、五〇九―五二〇頁。
- (58) 赤松啓介「神戸財界開拓者伝」(太陽出版、昭和十五年) 三〇―三二頁。「都道府県別資産家地主総覧」兵庫編下(日本図書センター、一九九一年)、一一頁。「神戸商工会議所百年史」(昭和五七年)、七二頁、八八頁。「株式会社登記簿」(神戸地方方法務局、所蔵)の神戸電燈株式会社(開鎖登記簿)。
- (59) 広田三郎、前掲書、第一卷、四ノ一四―二二頁。
- (60) 山内直一、前掲書、五六九頁。
- (61) 前掲「都道府県別資産家地主総覧」兵庫編上、三六頁。
- (62) 「日本全国商工人名録」(明治三十五年版) 四四六頁では、同社の住所・社長名と、日本米穀会社の住所・社長名が宮内町・沢田清兵衛という同一名であるので、日本米穀輸出会社は日本米穀の前身と考えてよいであろう。
- (63) 「神戸又新日報」明治二〇年一月七日号、二七〇号。
- (64) この石油倉庫会社は石油の貯蔵保管を業務とする資本金一五万円の有限責任会社である(「日本全国商工人名録」(明治三十五年版) 四四七頁)。「日本全国商会社役員録」の明治二十七年版と二十八年版を比較すると、前書には石油倉庫株式会社として掲載され、後書には和田倉庫株式会社として載せられているが、両社の住所・電話番号・資本金・株額面・役員構成はまったく同一であり、社名が変更されたものと考えざるをえない。
- (65) 広田三郎、前掲書、第五卷、三ノ三八―四一頁。前掲「神戸商工会議所百年史」七二頁、八九頁。

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向(東水園社)

- (66) 前掲「都道府県別資産家地主鑑」兵庫県上、九頁。
- (67) 同書、二二二頁。
- (68) 前掲「神戸商工会談所百年史」、七二頁、八九頁。
- (69) 緒川太一前掲書、二卷八一頁。
- (70) 播磨精米紡績は精米業と紡績会社を合併して設立されたものであり、精米業のほうが早く開始されたという。緒川太一前掲書、七卷(一五)一頁に同社の発起を二七年としている。「日本全国商會会社役員録」の明治八年版が播磨精米紡績の設立を一年としているのは、精米業の設立時を括弧しているのかもしれない。二七年版から同社は掲載されている。
- (71) 緒川太一前掲書、二卷、八三頁。海田正務編纂「全国多額納税者互選名簿」(明治二十一年)。
- (72) 前掲「油戸商工会談所百年史」九〇頁。
- (73) 日下安左衛門は明治三年の「貴族院多額納税者議員互選名簿」に二九四四の国税税率者として載っている。
- (74) 兵庫県の地主と商品流通の関係については昭和五五年「兵庫県史」五(昭和五五年)の五九六―五九九頁参照。
- (75) 石油採掘会社として当該期間に設立された企業としては他に、二二年七月に資本金一百万の北越石油会社と同一年一月設立の資本金七千四の尼瀬石油会社がある(『新潟県史』通史編7、近代二)。(昭和六三年、二四四頁)。
- (76) 明治二二年六月、洪沢栄・八木朋直等によって資本金二〇〇〇四の倉庫業「北越商會」が創立されている(『新潟商上会議所六十年史』昭和三年、四五頁)。
- (77) 牧田利平編「越後人物誌」中巻(野島出版、昭和四七年)、八七三頁。「日本石油百年史」(昭和六三年)、六三頁。
- (78) 「新潟県史」通史編7、近代二、九〇頁。
- (79) 内藤と石油事業については、前掲「日本石油百年史」、五七―五九頁参照。
- (80) 前掲「新潟県史」通史編7、近代二、二二九―二四三頁。
- (81) 萩原については、広田三郎、前掲書、五卷二ノ九五頁に略伝が載っている。
- (82) 「伊勢崎市史」通史編3、近現代、(平成三年)、二〇七―二〇八頁。
- (83) 「主要団体会社商店の沿革と現勢」其二「関東北地方之部」(『大日本織物二子六百年史』下(日本織物新聞社、昭和一五年)所収)、九〇頁。
- (84) 「中之条町誌」(中之条町誌編纂委員会編、昭和五年)、九二頁。

- (85) 群馬県議会図書室編集『群馬県議会議員名鑑』（群馬県議会、昭和四一年）、三二四頁。
- (86) 同書、三一九頁。
- (87) 『富士見村誌』続編（昭和五四年）、九〇七頁。『富士見村誌』（昭和十九年）、一六二頁。
- (88) 岡部福成『上野人物誌』中巻（大正三年）、三四九―三五〇頁。
- (89) 前掲『大日本織物』千六百年史』下、七五頁。
- (90) 『群馬県史』資料編23（昭和六〇年）、九四七頁。
- (91) 『日本全国商工人名録』（明治三二年版）。
- (92) 前掲『群馬県議会議員名鑑』、五〇九頁。
- (93) 前掲『富士見村誌』続編、九六六頁。前掲『群馬県議会議員名鑑』、一六一頁。
- (94) 名古屋電燈会社が明治二〇年九月二二日設立されているが、『語会社役員誌』では二八年版・二九年版とも二三年の設立としているので、ここでは考察の対象外とした。
- (95) 同書、三二二頁。『日本全国商工人名録』（明治三五年版）では、奥田正香は醬油醸造業となっている。
- (96) 広田三郎、前掲書第四卷三編、八三―八五頁。
- (97) 『愛知県史』（大正三年）、一一ノ二頁。
- (98) 同書、十一ノ三三頁。
- (99) 同書、十一ノ九〇頁。
- (100) 同書第一編、一〇二―一〇三頁。
- (101) 広田三郎、前掲書、第四卷三編一六一―一八頁。
- (102) 静岡県議会議員名鑑『静岡県議会議史』第一巻（昭和十八年）、三四二―三五六頁。
- (103) 静岡県議会議員名鑑『静岡県議会議史』第一巻（昭和五四年）、二六―三〇頁。
- (104) 香川真一は天保六年生まれの旧岡山藩士、明治四年明治政府派遣の世界周遊視察団の一人として欧米に渡航し、帰国後は大分県令などの地方行政を経て明治二二年岡山県の実業界に入り、第二十二銀行頭取や岡山商業会議所会頭等を務めた（『岡山県大百科事典』山陽新聞社、昭和五五年、五六八頁）。

松方デフレ期以後の商人資本の全国的動向（末永國紀）

- (105) 『岡山市史(産業経済編)』(昭和四一年)、四五三―四五四頁。
- (106) 前掲『岡山県商工会議所八十年史』、七九―八〇頁。
- (107) 同書、三〇頁。
- (108) 『倉敷紡績百年史』(昭和六三年)、一三三頁。
- (109) 明治二十三年の貴族院多額納税者互選名簿では大原孝四郎の職名は「商」となっている。
- (110) 東京大学社会科学研究所『倉敷紡績の資本蓄積と大原家の土地所有 第二部』(昭和四五年)、一四九―一六三頁、同書、一四三頁。
- (112) 『愛媛県史』人物(愛媛県、平成元年)の「宮内浩三郎」の項では、明治二九年放川汽船を誘致して伊予汽船を興業したとしているが、明治二八年発行の『日本全国語会社役員録』には同社に二一年の設立として既に載っている。
- (113) 伊予鉄道電気株式会社「わが社の三十年」一三三頁。(明治期鉄道史資料第二集3Ⅱ、所収)。
- (114) 「大洲銀行沿革」三六頁、(『愛媛県史』資料編、社会経済下、所収)。
- (115) 村田吉右衛門、前掲『西豫人物志』一、二五頁。村川太一、前掲書第五卷、五四頁。
- (116) 村川太一、前掲書第五卷、五四―五五頁。
- (117) 村田吉右衛門、前掲『西豫人物志』二、二二頁。
- (118) 同書、一八―一九頁。
- (119) 以下、村川太一、前掲書第四卷、三三三―三四四頁参照。
- (120) 岡本幸雄「産業資本成立期における地方紡績企業の展開―三池紡績会社と益田孝、資本調達問題等を中心として―」香村達三編『西向地域史研究』第四集、(文献出版、昭和五五年)によれば、明治二七年以後、同社の意志決定への益田の関与が具体的に指摘されている。
- (121) 『三池郡史』(大正二五年)、三六七―三七三頁。
- (122) 以下、『福岡県史』近代史料編『筑豊興業鉄道』、(平成二年)、一九―三二頁による。
- (123) 熊谷については『香春町誌』(昭和四年)、三三六頁参照。高瀬については『添田町誌』(昭和四四年)、二二五―二六頁、『田川市史』中巻(昭和五一年)六八九頁参照。なお『田川市史』が香春銀行の設立認可を明治二七年としているのは誤りである。
- (124) 前掲、『福岡県史』、二〇頁、日本全国商工人名録(明治二五年版)一三〇四頁。

(125) 『函館市史』通説編第一卷（昭和五五年）、六三八頁、六四七頁。瀬川光行、前掲『商界英傑伝』、六ノ二二～二三頁。

(126) 『新札幌市史』第二巻通史二（平成三年）、六八一頁。

(127) 『商界英傑伝』、九ノ一～四頁。

(128) これらの商人に連動した動きとして、二八歳で家督を継ぎ、立明治二年三月にパリ万国博覧会の視察を兼ねて商況視察に出かけ、織物見本を入手して日本での製織を命じたという、京都の呉服商高島屋の四代目飯田新七の欧米出張がある（『高島屋口』十五年史）昭和四三年、七頁。